

レジリエントな 地域社会

漆の木のある景観

岩手県二戸市浄法寺における漆掻きと日々の暮らし

人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

羽生 淳子 編



表紙写真説明

浄法寺町明神沢漆の森（ふる森）に植林された漆を掻く工藤竹夫さん
（2018年7月26日、羽生淳子撮影）

目 次

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
地球研ユニット：災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生

レジリエントな地域社会 2

漆の木のある景観 —岩手県二戸市浄法寺における漆掻きと日々の暮らし—

はじめに	中静 透	……	ii
第1章 浄法寺プロジェクトの目的 —漆の木のある景観から考える地域社会の ^{レジリエンス} 弾力性—	羽生 淳子 伊藤 由美子	……	1
第2章 漆掻きについて	伊藤 由美子	……	5
第3章 漆掻きと生業の歴史の変遷 —吉田信一さんのお話—		……	7
第4章 漆掻きと漆の種苗作り —大森清太郎さんのお話—		……	16
第5章 産地直売所「キッチンガーデン」について —小野知子さんのお話—		……	28

はじめに

中静 透

このブックレットは、国産漆の70%以上を産するという、岩手県二戸市浄法寺の漆とそれにかかわる生業の記録である。二戸市の隣町、一戸町には御所野という縄文時代の遺跡があり、そこからも漆塗りの遺物が出土する。つまり、漆は数千年も続いたレジリエントな産業なのである。とはいえ、最近数十年は日本の漆産業にとって、最も厳しい時だったのかもしれない。漆掻きという生業が、浄法寺のほかにはほとんどなくなってしまったのである。

羽生さんたちのチームは、この浄法寺でどのように漆掻きが続いてきたのかを聞き取りによって明らかにしてゆく。実は2018年12月に、羽生さんと伊藤さんに無理を言って、聞き取り調査に同行させていただいた。数千年も続いた技術は、当然優れた観察に基づく洗練された技術を伴っている。そうした文化や歴史の変遷も非常に興味深いし、ウルシという植物の生態に関する観察とその理にかなった技術は、植物生態学のキャリアをもつ私にとっては、とても興味深いものであった。

しかし、聞き取られた話の内容にはそれ以上の示唆がある。樹液だけでなく、木材も利用し、花蜜も利用し、果実も利用し、という多様な利用方法は、産業としてのレジリエンスを高めることにつながっている。一方で、農業や林業と漆産業を並立させることが、地域の生活やコミュニティのレジリエンスにも関わっている。聞き取りにご協力いただいた方々は、いずれも東北の人らしい率直で控えめな方々であるが、そうした内容を染み入るように話していただいている。

現在、自治体も協力して次世代の漆掻きや漆塗り技術者の育成にも力をいれておられるが、こうした内容は、技術を引き継ぐ若い人たちの将来へのメッセージともなりうるものと思う。

第1章

浄法寺プロジェクトの目的

—漆の木のある景観から考える地域社会の^{レジリエンス}弾力性—

羽生 淳子・伊藤 由美子

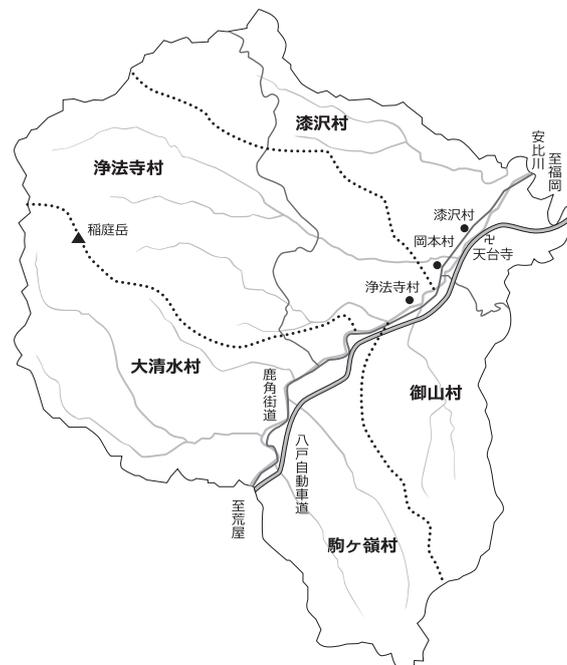
はじめに

私たちの研究チームでは、2015年から、岩手県二戸市浄法寺町（地図1-1）で、漆掻き職人の方々からの聞き取りを中心とした研究活動を行ってきた。このプロジェクトの主な目的は、漆掻きを含めた小規模な生産活動が、浄法寺地区における人々の暮らしと地域社会の^{レジリエンス}弾力性を形作るのに果たしてきた役割を検討することである。調査においては、浄法寺地区における漆掻きを含めた生業の多様性、漆掻きと農業、林業等によって形作られた文化景観と植生の変化、漆掻きの基盤にある伝統知・在来知とそれを支える個人の工夫、将来への展望などのテーマを中心に聞き取りを進めた。

浄法寺地区の地形と歴史的背景

浄法寺町は、奥羽山脈北部山域にある稲庭岳の東部に位置する。安比岳^{あっぱだけ}を水源とする馬瀨川^{まべち}の支流・安比川とさらにその支流に沿って開かれた地域で、地形的には、山林がその約8割を占める。この地域の農業は、近代まではヒエ、ムギ、ダイズ、ソバなどの畑作を主体とし、稲作は畑作より少なかった（浄法寺町史編纂委員会1997）。雑穀栽培を主体にしたこのような農業のあり方は、歴史的には、岩手県北地域の多くに共通する特徴だった（真貝2019）。

浄法寺地区は、古くから漆の生産地として知られており、現在、国産漆の約7割は、浄法寺町を中心とする二戸市で生産されている（滴生舎2019）。1960年代以降にプラスチック製品が普及した結果、



地図1-1 浄法寺町の旧5か村（太字）、および、それ以前の16か村のうちこのブックレットで言及されている主な地名（●印）（1889年に5か村が合併して浄法寺村が成立。旧5か村は、それぞれ浄法寺村の大字となる。1940年に町制施行により、浄法寺町。2006年に、合併により二戸市の一部となった際に、旧浄法寺町の区域が二戸市の町名として引き継がれた）（浄法寺町史編纂委員会1997：173頁、1998：572頁を参考にして作成）。

国内における漆器の需要が減少して、国産の漆生産量は激減した。さらに、2000年代以降は、漆器生産における輸入漆（主に中国産）の割合の増加が著しい（二戸市2014）。しかし、浄法寺地区を中心とする岩手県では、漆生産が、歴史的な盛衰を経ながらも地域の生業複合の一部として現在まで存続している。特に、ここ10年あまりは、日光東照宮などの文化財の修理修復に国産漆の使用が奨励されたことによって、国内における国産漆の需要が増加し、浄法寺地区における漆の生産量も、それ以前と比べると回復している（二戸市2014）。

これまでの調査成果の概要—漆掻きを含む小規模な生業の多様性・景観・在来知—

聞き取り調査を通じて、漆掻き、畑作、稲作、林業、畜産業、養蚕を含む生業の多様性と季節性が精緻な周年サイクルを形成していたこと、そして、このような生業複合の特徴の一部は、歴史的な変遷を経ながらも現在まで受け継がれていることが確認された。漆掻きは基本的には夏場の作業であり（第2章参照）、漆掻きだけで家族全員が生計を立てるのは難しい。したがって、漆掻き職人の暮らしは、農作業をはじめとする家族の生業サイクルと切り離せない。

さらに、聞き取りからは、浄法寺地区の地域景観における漆の木の重要性とその歴史的変遷が明らかになった。漆の木は、1960年代頃までは畑の周りや畑の中に植えられるのが一般的だった。しかし、農業の機械化に伴って、畑の回りや畑の中の漆の木は、作付けの邪魔になるという理由で除去された（第4章参照）。近年では、植林された漆林における漆掻き（たとえば表紙写真）が一般的だが、漆の需要の増加に対して植林のスピードが追いつかず、将来における漆の木の不足が心配されている。

聞き取り成果からは、長年の経験に裏打ちされた漆掻き職人の漆についての知識だけでなく、植物としてのウルシの木とその生育場所の土、そして地域の植生に関するさまざまな在来知の存在も浮かび上がってきた。浄法寺地区における漆生産の歴史を理解してその将来を考えるためには、ウルシの木の日々の変化、6月から10月までを中心とする漆掻きの季節サイクル、年毎の漆の出来不出来や外的要因による需要の変化、そして第二次世界大戦前から現代にいたるまでの地域の歴史的変遷、というさまざまな時空間スケールの変化を理解する必要がある。このような視点は、私たちがこのプロジェクトの理論的基盤とした歴史生態学の考え方と一致する（Balée 1998、2006、2018）。

東北地方の他地域と同様に、浄法寺地区でも、1960年代以降、専業農家が減少して若い人々の都市への移住が目立っている。その中で、地区内の産地直売所「キッチンガーデン」で行った聞き取りからは、自給的農業の延長から出発して、野菜や山菜、雑穀、加工食品等を出荷・販売するようになった、女性たちの努力とその成果も明らかになった。

このブックレットについて

浄法寺地区における私たちのこれまでの調査の概要は伊藤・羽生（2018）に示したが、個々のインタビュー内容の豊富さを、ページ数の限られた論文に盛り込むことは不可能だった。今回、漆掻き職人の吉田信一さんと大森清太郎さん、そして、産地直売所「キッチンガーデン」の小野知子さんのご承諾を得て、3人の方々へのインタビューの内容を聞き書きの形で編集し、『レジリエントな地域社会』シリーズのブックレットとして出版することが可能になった。

ここに掲載した3編のインタビューの随所からは、話し手の経験と人生哲学がうかがわれる。聞き書き原稿の編集にあたっては、伺ったお話の内容の幅広さと個人の視点を生かすために、可能な限り原文の脈絡を生かす形で構成を行った。この地域独特の言葉を生かした聞き書きを目ざすのが理想だったが、私たちの聞き取り技術では話し手の語り口をそのまま再現することは困難だったため、聞き書き原稿の文体は簡略にまとめた。

展望

漆掻きは、個々の漆掻き職人の技術と知恵と勤に依拠するきわめて個人的な作業であると同時に、漆生産自体は、この地域の顔となる産業だ。しかし、長期的に安定した漆の供給を確保するためには、漆林を含む地域の生態系保全、次世代を担う漆掻き職人の育成、漆器生産と連動した、安定した販売経路の確立などが不可欠となる。これらの要素のうちどれが欠けても、需要と供給の不均衡が生じ、これまで一定の自律性を保ってきた浄法寺地区の漆生産の将来に不安を与えることになる。漆の話とは一見まったく異なるように見える産地直売所の経営も、地域の生態系との関わり、人材育成、販売のネットワークが鍵になるという点では、漆生産と共通項を持つ。

漆の木を含めた森林管理や、漆掻きの技術を受け継ぐ若手人材の育成など、漆生産における将来への課題は数多い。それにもかかわらず、私たちは、これからの地域社会のあり方を考えるにあたり、浄法寺地区における漆生産を含めた小規模な生業活動の多様性と重層性、そしてそれを取り巻く景観の過去と現在から、多くを学ぶことが可能だと考えている。大都市に偏重した大量消費経済の加速化は、日本各地でさまざまな社会・環境問題を引き起こし、成長モデルから持続可能モデルへの転換は急務となっている（羽生・佐々木・福永2018）。このブックレットで紹介した、人と環境との共生関係を基盤とする漆生産と産地直売所のあり方は、私たちに、地域に根ざした小規模な生産活動の未来における可能性を改めて考えさせてくれる。

謝辞

このブックレットを出版するにあたり、吉田信一さん、奥様の吉田カツエさん、ご子息の吉田茂明さん、大森清太郎さん、小野知子さんには、インタビュー内容の出版についてご快諾をいただくとともに、草稿の内容を確認・校閲していただいた。第2章の「漆掻きについて」の原稿は、吉田さんと大森さんのお話に加えて、日本うるし掻き技術保存会会長・岩手県浄法寺漆生産組合顧問の工藤竹夫さんから伺ったお話も参考とし、対応する図版（図2-1～2-9）は、工藤さんからご提供いただいた写真を使わせていただいた。また、二戸市漆振興課、岩手県浄法寺漆生産組合、産地直売所キッチンガーデン、滴生舎、二戸市二戸歴史民俗資料館、二戸市浄法寺歴史民俗資料館、御所野縄文博物館の諸機関には、調査を行うに際してご協力をいただいた。

本研究は、総合地球環境学研究所（地球研）フルリサーチ・プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ—」（略称：小規模経済プロジェクト、研究番号14200084）、および公益財団法人日本生命財団学際総合研究助成プロジェクト「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫」（羽生・佐々木・福永編2018参照）と連携した。両プロジェクトのメンバーとプロジェクト研究員・研究推進支援員には、調査の準備と研究の遂行にあたり助力を得た。窪田順平さんと中静透さんは、私たちの浄法寺プロジェクトの進行を辛抱強く見守ってくださった上、調査成果の解釈について有益なご助言をいただいた。唐津ふき子さんと北斗プリント社の山崎隼和さんには、本ブックレットの編集・出版作業に多大なご尽力をいただいた。

末筆ながら、これらの方々と諸機関に心から感謝の意を表す。

文献

- 伊藤由美子・羽生淳子2018「生業の多様性と漆—歴史生態学からみた二戸市浄法寺地区の漆産業—」羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編『やま・かわ・うみの知をつなぐ—東北における在来知と環境教育の現在—』東海大学出版部、pp. 189-202。
- 浄法寺町史編纂委員会1997『浄法寺町史上巻』浄法寺町。
- 浄法寺町史編纂委員会1998『浄法寺町史下巻』浄法寺町。

- 真貝理香2019「雑穀がつなぐ過去・現在・未来」『レジリエントな地域社会 Vol. 1：地域のレジリエンスと在来知』総合地球環境学研究所（印刷中）。
- 滴生舎2019「うるしの森から」<http://urushi-joboji.com/joboji/kokusan>（2019年2月24日アクセス）
- 二戸市2014「漆生産量・輸入量の推移」https://www.city.ninohe.lg.jp/forms/info/info.aspx?info_id=316（2019年2月24日アクセス）
- 羽生淳子2018「在来知の活用と地域のレジリエンス」窪田順平編『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol. 6：震災復興と地域のレジリエンス』pp. 52-63。
- 羽生淳子2019「在来知とレジリエンス——持続可能モデルへ転換する」日本生命財団編『人と自然の環境学』東海大学出版会、pp. 41-60。
- 羽生淳子・佐々木剛・福永真弓2018「総括」羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編『やま・かわ・うみの知をつなぐ——東北における在来知と環境教育の現在——』東海大学出版部、pp. 265-270。
- 羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編2018『やま・かわ・うみの知をつなぐ——東北における在来知と環境教育の現在——』東海大学出版部。
- Balée, William (ed.), 1998. *Advances in Historical Ecology*. Columbia University Press, New York.
- Balée, William, 2006. The research program of historical ecology. *Annual Review of Anthropology* 35: 75-98.
- Balée, William, 2018. Brief review of historical ecology. *Les nouvelles de l'archéologie* 152: 1-9.

第2章

漆掻きについて

伊藤 由美子

日本における漆の利用は、縄文時代から始まる。約9,000年前に北海道垣ノ島B遺跡から漆製品が出土し、東北地方北部では縄文時代前期の約6,000年前頃の遺跡から漆器やウルシ材などが出土している。

浄法寺地区で漆の生産が行われたのは、文献等の史料から遅くとも近世以降とされている。近世における漆掻きは、「養生掻き」といわれ、漆の木を数年にわたって掻き、漆を採取する方法で行われてきた。

また、盛岡藩は、漆かき奉行をおき、産地の漆の量や採集した実の量を把握していた。漆は「御禁制」の品とされ、盛岡藩にとって重要な産物であった。

明治5・6年以降に、現在の福井県などから「越前衆」と呼ばれる漆掻き職人達が来て、1年で漆を掻き終えて木を切ってしまう「殺し掻き」の技術を伝えた。1年で採れる漆の量は、「殺し掻き」の方が多く、以降「殺し掻き」の技法が普及し、現在に至っている。

「殺し掻き」の方法（図2-1・表2-1）

目立て（図2-3）

入梅の頃、漆の幹の粗皮を削って平らにしたあと、地面からおおよそ20 cmの所に、長さ1～2 cm、深さ3 mmの溝を、約30～35 cmの間隔でつけ、反対側の幹にも同じく溝をつける。これは、2回目以降の「辺掻き」の基準をきめると同時に、木に刺激を与えて樹液の分泌をよくするためである。

辺掻き（図2-4・5）

「目立て」の溝を基準、木に傷をつけて漆を採取する。6月から9月下旬にわたって採取することを「辺掻き」といい、採取した漆は「辺漆」と呼ばれる。「辺漆」は、採取した時期により3つに分けられる。6月上旬から7月上旬に掻いた漆を「初辺^{はつへん}」、7月中旬から8月下旬に掻いた漆を「盛辺^{さかりへん}」、9月上旬から下旬に掻いた漆を「末辺^{すえへん}」という。

裏目掻き（図2-6・7）

「辺掻き」が終わった10月に、目立ての下と辺掻きの上の間に、幹を半周する傷をつけて漆を採取する。さらに幹の上の方や太い枝などにも、はしごをかけて、傷をつけ漆を採取する。採取した漆は「裏目漆」と呼ばれる。

止掻き

裏目掻きと裏目掻きの間に、幹を1周する傷をつけ、樹液の流れを遮断する。この作業の後、漆の木を伐採する（図2-10・11）。

枝掻き（図2-8・9）

伐採した漆の木の枝を取って切りそろえて束にして、1週間から10日ほど水に漬ける。カンナで傷をつけて樹皮が3枚に分かれるようになったら、枝に傷をつけて漆を採取する。一把は、約30本の枝を、長さ60～70 cmにそろえて束ねる。漆の木400本、約120～150把が一人分である。

文献

浄法寺町史編纂委員会1997『浄法寺町史上巻』浄法寺町。

日本うるし掻き技術保存会2000『漆－うるし掻きに生きる職人のくらし－』

表 2-1 漆掻き作業の 1 年の工程

		足場作り などの準備	目立て	辺掻き			裏目掻き	枝取り	枝掻き	伐採・ 片付け
				初辺	盛辺	末辺				
4月	上旬									
	中旬									
	下旬									
5月	上旬	■								
	中旬									
	下旬									
6月	上旬		■							入梅
	中旬			■						
	下旬									
7月	上旬									
	中旬			■						
	下旬				■					
8月	上旬									
	中旬				■					
	下旬									
9月	上旬									
	中旬				■					
	下旬					■				
10月	上旬									
	中旬									
	下旬					■				
11月	上旬									
	中旬							■		
	下旬								■	
12月	上旬									
	中旬							※ 1	■	
	下旬									■
1月	上旬									
	中旬								■	(終了しない場合は、雪解け後に再開)
	下旬								■	
上旬								■		
2月	中旬								■	
	下旬								■	
	上旬								■	
3月	中旬								■	
	下旬								■	
	上旬								■	

※1 昔行っていた作業で、現在はほとんど行われていない。

第3章

漆掻きと生業の歴史の変遷

—吉田信一さんのお話—

吉田信一さんは、昭和6（1931）年生まれ。お父様は漆掻き職人の故・吉田三之さん。吉田信一さんは17歳から漆掻きをはじめた。戦後、父とともに、漆掻きのかたわら、農業・林業・牧畜業などを行ってきた。85歳まで漆を掻き続け、現在は研修生の指導と、山で木の手入れを行っている。今回の聞き書きでは、吉田信一さんの祖父である三角長松さんがいた戦前期から現在までの生業の変遷と漆掻き、ウルシが生える畑や山について、お話を伺った。なお、ここにまとめた内容は、2015年4月14日の第1回インタビューをベースに、2018年12月22日に第2回インタビューを行い、両者の内容を統合したものである。作成した原稿は、吉田さんに校閲をお願いした（伊藤・羽生）。

漆掻きについて

毎年、漆掻きを始めるのは、6月10日以降の入梅過ぎです。その前は、まだ漆の木が休んでいる時期なので、目立ても含めて、傷は付けられません。傷を付けて少しでも漆が出てしまうと、木が痛みます。やはり入梅がこなれば駄目なのです。入梅前には、漆の木の周りの下草刈りをしておくのです。漆を掻く時に歩く道の下刈りをしておくと、足への負担が少ないからです。若いときは気にせずに楽にやっていたことでも、年をとると、足場が悪いとつまずいたりします。また、漆の木に木材でやぐらを組んで足場を作ります。

昔は年に400本から500本を掻きましたが、今は84歳になったので本数は少なくなりました。去年で辞めることにしていたけれども、やはり漆を掻く時期が来るとやりたくなります。今年（2015年）は、80代の漆掻き職人の中には、体調を崩して掻かない人が多くなりました。そのため、ほんの少しでもいいから掻いてほしいと言われるのです。

自分の山の木であれば、途中で怪我をした場合は掻かずに投げ出してもいいのですが、他人の山の木は苗木などにお金がかかっているのです。掻いてしまわないと売った方も買った方も損をしてしまいます。今年は、他の人が掻ききれなかった漆の木を捨てきれずに、掻きに行きました。浄法寺漆生産組合では、来年（2016年）も今年と同じ量の漆を掻こうということですから、来年になって掻くことになってもいいように、木の準備もしないといけません。

今年は、日光東照宮の修復で漆を使うということで、掻いた漆がよく売れました。今は、日光も国も日本産の漆だけを使うというから安心しています。3年前には、日光東照宮の修復のために浄法寺地区の漆を全部買うから掻いてください、と言われて、みんなで頑張ってたくさん漆を掻きました。しかし、日光東照宮の建物自体が損われていることがわかり、修復するための銘木を買うお金が必要になったということで、その年は浄法寺地区の漆は少ししか買ってもらえず、結果として、たくさんの漆が売れ残りました。掻いた漆の5分の1にもならないくらいの値段しか、収入になりませんでした。本当にもう辞めた方がいいのではないかと思いましたが、17歳の時から60何年も漆掻きの仕事をやってきたので、今更、別の仕事ができるわけではありません。

漆掻きの仕事は収入になりますが、今まで2回も3回も売れない時があり、そのたびに困りました。漆が高く売れたのは、戦後の1947・1948年から1950・1951年くらいまでで、その後、漆の値段が落ちました。漆が売れなくなったのは、今度で4回目です。何年も売れなかったので、本当に絶望しました。掻いてから何年も売れずに家に置いてあった漆がありました。余った漆はためて、自分の家のオトシ（床下）に入れておきます。乾燥すると、目方が減って、色も悪くなるし、樹液の伸びも新しい

のと比べると質が落ちます。

漆掻き職人について

今年から、また浄法寺地区の漆を必要としているような話ですね。しかし今になって全部売れるようになったといっても、漆を掻く人の多くが年をとってしまったため、漆を掻ける人が少なくなっています。漆が売れなかったため、若い人達は生活ができずに、漆をやる人が減りました。特に、漆掻きを始めた一年目では、漆を採れる量も少ないので、売れなければ本当に収入になりません。売れない年が何年も続いた結果、若い人が他の仕事に移ってしまいました。また、漆掻きの仕事は1日中ほぼひとりで作業し、山で獣の声や小鳥の声しか聴くことができない孤独な作業であることも、やめる理由の一つのようです。

現在、漆掻きをしている人は、戦争の終わり頃から始めた人が中心です。2006年頃からは、浄法寺地区の出身者で新しく漆掻きになる人がいない状況です。特にこの1年か2年は、地元出身の漆掻きの人が育っていません。

漆掻き技術保存会には、研修生が来て、1年間漆掻きをやります。しかし、自分の地元に戻って漆を塗ったり、あるいは、勉強や研究のため来て帰ってしまう人が多く、浄法寺地区に残る人は2、3人です。

漆掻きの作業について

漆の樹液は、朝と夕方によく出ます。朝は露がたまるので、出やすいですが、出すぎると木が弱って枯れてしまうので、考えて掻かなければいけません。天気の良い日は、漆の木はいつも同じ順番で掻き、次に掻くまでの日数を4日あけますが、その時も木が弱っているかどうかを考えなければいけません。雨が降った時は休みます。雨が多いと漆の水分が多くなり、量も取れなくなります。また雨が降った時に漆を掻けば質が悪くなるので、長雨に降られると商売があがります。去年は長雨で大変でした。でも、今の漆掻きの人たちは賢くなって、雨が降った時にカマズリ（漆の木の表皮をはがす作業）をして漆を掻くための準備をします。すると、天気がよくなって木が乾けば、すぐに掻くことができます。昔は、雨が降れば完全に休みにしました。最近は、雨が降ったことを良い方に考えているようです。カマズリも木の皮を削り過ぎると駄目ですし、浅すぎて木の皮が残っていると、掻いた時に木の皮が一緒に入ってしまうから、加減が必要です。

たくさんの木を掻くと休むことができなくなりますし、少ないと長く休むことになります。また、秋になって日が短くなってくれば、1日では回れなくなります。そうすると、やれるところまでやって、翌日に続きから始めるので、少しずつ作業が延びていきます。

漆の質について

漆の木は、小さい木よりも少し大きい方がいい漆が出ます。大きい漆の木を掻くと、漆もたくさん採れます。昔は漆掻き職人が多く、木が伸びないうちに掻いてしまったこともたくさんありました。今では、大きい木を掻きたいので、成長した木を選んでいきます。

最近、買う人に一番好まれるのは、初辺（6月～7月末頃に掻いた漆）です。漆屋さんなど使う人達は、乾きがいいと言って初辺を欲しがります。昔であれば、初辺は水分が多くて目方が減るからと安く、高いのは、より後で掻いた漆（新物）でした。今の漆屋さんたちは、まず一番先に初辺が欲しいと言います。そのため、板ガラスに漆を塗って乾く時間を見て、乾きが何日もかかると「遅い」と言われて漆が戻ってきたこともありました。「これは初辺ではないのではないか」と言ってくる時もあります。しかし、掻く人によって、力の入れ方や傷の付け方で乾き方が違います。

8月頃に掻く「盛り」の漆は、乾きは遅いのですが、質はいいし、伸びます。9月いっぱい質のいい漆を掻くことができます。10月に入ると漆の質が悪くなるので、なるべくいい漆のうちに掻いて売りに出そうと、9月末くらいまで漆を掻いていましたね。やはり採れた漆を見れば、辺掻き（6月から9月の漆掻き）でも末の漆は、盛りの漆より足が早かったり、もろもろしたり、色が黒かったりと、質が悪いので、昔は仲買人が安い値で持っていったそうです。また、畑の漆の木を掻いているとき、雨で土がはねるとその傷や木に土が付きます。さらに傷をつけると、漆を採ったときに土が入ります。漆に土が入っても、昔は土などが底の方にあるものだと思って買って使ったので、何の問題もなく売れましたが、今は重さも増えるし、土が入っていると砂が入っているとと言われるので、濾さなければなりません。つまり、漆の液を鍛えて出さないと売れないのです。

辺掻きが終わると、昔は、10月を過ぎてから裏目掻きをやりました。木の高いところに登って、辺掻きで傷つけた幹の反対側に傷を付けて漆をとりました。質が悪い漆（ケヤネウルシ）は、下地などに使えます。漆は何層にも塗るので、質を変えて塗るからです。辺の漆よりも伸びないから厚く付いて下地にいいし、値段も、辺掻きの半分くらいです。下地には、伸びが遅くても厚くつくのがいいようです。そうやって、質の悪い漆も無駄にせず、それぞれ向いているものに使いました。

9月末を過ぎるとケヤネウルシになってしまうという理由から、浄法寺漆生産組合では、漆が余った時に相談して、裏目掻きをせずに辺掻きだけでやめることにしました。そうすれば全て良い質の漆になるからです。

裏目掻きをやめてから3年ぐらいになりますが、今年から、また裏目を掻かせるかという話をしています。今、文化庁や日光などから、裏目掻きの漆まで売ってほしいと言ってきているからです。漆の値段は上がっていませんが、量を買ってくれるので、裏目掻きもやることになりました。

裏目掻きのあとには、枝掻きをしました。小屋を建ててストーブを置き、中にほんの細い漆の枝を集めて、水に浸けて漆掻きをしました。つまり、本当に最後の最後まで漆の樹液を採っていました。

今でも何人かは枝掻きをやっています。30～40本の枝を束にしたものを水につけます。1日に8束くらい掻くことができます。漆の量は、8束で10～13匁くらいですから、茶碗1杯も採れず、効率が悪いです。ただ、枝を捨ててしまうよりはいいと思って掻きました。しかし、12月になれば寒くなり、作業するのはつらいので、多くの方は11月で漆掻きをやめて、別の仕事に行くようになりました。

漆の木は、掻いた後にすぐ切って、枝を束ねて運搬しなければいけません。掻き終わって切り倒した漆の木は、山の主に返したり、木を提供してくれた人のところへ置いたり、自宅で使ったりします。漆の木を切って片付けるまでが、漆掻きの仕事です。木を切らないと、ひこばえ（傍芽）が出ません。漆の木は、切れば次の日から成長を始めますから、切った後も木の世話をして成長させます。切りっ放しだと、掻くことができる漆の木が足りなくなります。

漆の木は生命力があって、冬を越した春になっても、枝を払ったところや伐採した切り口から白い樹液が出ます。半年から8ヶ月くらい放っておかないと乾きません。

漆を掻いたあとに切った木は、薪にしたり、材木にしたりしました。今は、タバコの支柱には鉄パイプなどを使っているようですが、昔はタバコの支柱やイネを干す支柱に使いました。漆の木はクリの次に長持ちし、土に強く腐りにくく、クリよりも成長が早く、重さも軽く、掻いた後の漆の木は使いやすい長さでした。家の土台には腐らないクリを使いますが、作業するためには漆の木が使いやすいのです。昔は掻き終わった木でアバギ（浮子）を作りました。

漆に良い土地と漆の質について

畑で植えていた漆の木と、今、山で掻いている漆の木とでは、樹液は違います。やはり畑の方が、

肥料の養分をとって実の入りもいいし、枝ぶりも成長もいいから、いい漆が出ます。同じ手入れをすれば、畑の漆の方が、木の成長が良くなくても樹液が出るのです。下草を刈るなどの手入れをすれば、漆造林の木も畑の漆の木と同じ質になります。また木が密集した林に生えている漆の木より、畑のまわりにある何年もたった大きな木のほうが、養分をたくさん取っていて、良い漆が採れると思います。木が密集していると養分が足りなくなるのです。また下草を刈れば、漆は出るのではないのでしょうか。下草の刈り方も、人によって好みがあって、木の周りを土の際までずっと刈る人もいます。年に必ず2回か3回は下草刈りをやらなければならないのです。下草が大きく育ってしまった場合でも、4日ごとに漆を掻きに行くとき、大きくなった草を刈っておけばいいので、私はそうしています。

赤い土とか黒い土、白っぽい土などの土の質や、木が生えている場所でも、漆の出や質に違いがあります。幾ら大きな木で「ああ、いい木を買った」と、買った時には思っても、実際掻いてみると「いやあ、あそこいい木だと思って大きい木を買ったけど、見た目では出ないのが分からなかった」ということがよくありました。赤土か黒い土が、漆の木にはいいですね。白い土や砂は、一般的には漆が出ないですね。湿気がありすぎるところよりは、湿気が少ない方が漆の木にはいいですが、黒土が深く、ある程度湿気があるところの漆は、長持ちして伸びがあります。だから畑の周りの漆の木が良いのです。谷地ではなく、山の山頂でもなく、山と山との沢めいたところ、小川のような水が流れているところから少し上がったような所がいいです。杉を植える土地では、大体の場合、漆もよく成長します。しかし黒土でも、風が強く、松が立っているようなところは駄目です。風の弱いところでは、良い漆が採れるし、木の成長もいいのです。しかし、今までのところ、杉を切って漆に変えようというような個人の山の持ち主はいません。1回植えれば、植林地にそんなに手間をかけたくないでしょうね。

漆の植林について

家の近くの水田や畑の周りや山に漆の木があります。漆の木が好きだから育てていて、今年も、育てている漆を掻く予定でいます。漆を掻き終わってから、切ると切り株からひこばえが出てくるので、それを育てれば、苗から育てるより早く10年でおがる（成長する）のです。

昔から浄法寺地区では、畑の周りには漆の木を育てておいたものです。自分の畑にも、毎年、いつでも漆が掻けるように生えさせておきました。しかし1950年以降、トラクターに乗って耕すようになると、木が立っていると邪魔になるので切るようになりました。畑の周りの漆の木を掻いた後に切り倒して、ひこばえを育てずに終わりにしてしまうこともあるようです。

妻は漆の木のある畑で働いたことがなかったので、鍬で畑を耕していると、背中を漆の木にゴンとぶつけました。何回も背中やももをぶつけて、いやいやこんなところで働かなければならないのも大変だと思ったようです。ぶつけてかぶれることはなかったですが、黒くなったりします。

最近では、農家の中には高齢化などによって畑をやめる人に、畑一面に漆を植えることをすすめているようで、苗木への補助もやっています。田子の農家では、平らな畑の全面にカラマツや漆の木を植えています。

畑の周りの漆を掻いていた頃は、あちらの畑に10本、こちらの畑に10本というように、1人で1日中歩き通して掻いていました。畑の周りは余り歩かなくてもいいので、掻く人は楽です。今はほとんど畑がなく、山で造林した漆の木を掻いています。もっと何年も前から漆造林ということを誰かが考えていれば、若い人たちを何人でも増やして掻くこともできました。今からでは遅く、漆の木を植えても、掻くことができるまで育つのに時間がかかりますから、すぐにたくさん掻くことができません。

山に植林した漆の木でも、葉たばこの栽培などで時間がない人は、手入れをしません。すると植えた漆の木が雑草に負けて枯れてしまいます。私は漆を掻きたいので、毎年下草刈りをして、肥料を少

しずつ入れて手入れしています。去年も、他人の山で持ち主が植えたままの漆の木を、持ち主から掻いて欲しいと言われ、手入れをして、掻く木の本数に足して掻きました。掻きつづけるためには、漆の木を育てていかないといけません。

浄法寺地区や、青森県三戸町、田子町の方などでは、畑にたくさんあった頃に植えた木が成長し、持ち主が売ってくれます。その場所では、1か所でも、1日とか、少なくとも午前中は掻くことができます。

5年前、弟と二戸の福岡や金田一ではなく、青森県田子町へ行って漆を掻いてきました。それまで、私は、自宅から通える範囲だけで漆を掻いていました。一度掻いて切った後、何年か経ってひこばえから育った木が掻けるようになると、木の持ち主から掻いてくれないかと電話が来て、掻かせてもらうという繰り返しでやってきました。

浄法寺漆生産組合で漆を植林する山は森林管理署から借りています。また、漆の木は個人の山にも植えています。個人の畑にも植えています。漆掻き職人も漆を植林した山を持っている人もいます。これからはそういう例が増えるでしょう。

吉田家のライフヒストリー

私の父は吉田三之^{さんの}、母はフクといいます。もう二人とも亡くなりました。祖父の代からずっと浄法寺地区に住んでいます。

現在、私は、息子夫婦と一緒に暮らしています。孫は3人います。

父は婿でした。浄法寺町内の隣村の岡本の出身で、15・16歳頃からずっと漆掻きをやっていました。父の実家の姓は吉田で、次男の宇吉が継ぎました。

我が家にある写真です（漆入札場 1935年 秋 浄法寺村：図3-1）。樽は5貫目樽ではなくて10貫目樽です。昔はこのようにたくさん採れました。

父の長兄は、漆沢地区の、屋号が井戸端という漆掻きの家に養子に行ったのですが、父は、幼い時からその兄と一緒に漆沢へ行き、そこからうちへ婿にきたのです。井戸端という家の跡継ぎが死んでしまい、長兄が養子へ行った時、弟である父も一緒に行きました。とにかく働かないと食べられない時代で、兄弟も多かったので、小さい頃から兄のところに預けられて、そこから母の家へ婿に来たそうです。父の長兄は漆田宇八といいました。漆沢は、漆を集める仕事をしている地区でした。

祖父の名前は、三角長松です。祖母のサトは祖父の家に嫁に行きましたが、つらくて実家へ帰ったところ、婿である祖父も一緒に来てしまったそうです。祖父は、小作の人から米などを集めて、大地主の所へ馬車で運んでいました。当時は、お金になるため、馬などの動物を使って、馬車を使ったり、馬の背に鞍を付けたりして荷を運ぶ仕事が行っていました。当時は砂利もない土の道だったので、道が悪く、馬でないと荷が運べませんでした。馬車で木材も運んだといえます。

祖父母は、はじめは道路に面した所に小屋を建てて暮らしました。妻の実家に二人で戻ってきたため、本当に掘っ立て小屋のようなところだったと思います。昔ですから、1本の木を切るためにも鋸を使ったので時間もかかったでしょう。古材なども使って小屋を建てたのではないのでしょうか。

祖父が馬で荷を運んでいた頃は、家の隣に厩舎がありました。当時の農家は、牛も馬も使っていました。

祖父はお酒をたくさん飲む人で、父が働いたお金を全部使ってしまったそうです。この先やっつけられないと思った父は、親戚が多くいる東京へ1カ月か2カ月くらい行ってしまいましたが、母が後を追って東京に行き、2人一緒に汽車で帰ってきたといえます。父は漆掻きをしていたので、いろいろ考えて、母が迎えに行った時が良い頃だったのではないのでしょうか。

父は祖父三角長松の酒飲みを嫌い、酒飲みの姓は名乗りたくないから、吉田の姓を名乗るならば家

を継いでもいいと言ったそうです。

父は、漆を掻いて得たお金で、1949年頃に道路沿いに家を建てました。さらに1979年には、今の家を建てました。1949年頃は、本当に物がなく、ガラス1枚買うにも大変な時代でしたが、うちの古い家には内側の窓のところにガラスをたくさん入れてありました。当時は漆の値段が高く、父は、1年漆掻きをすれば、家を建てるぐらい稼げると言っていました。戦後で物がなく、人が物にお金を出した時代でした。

戦後は、自分たちで米を作っても、家族で食べるくらいしか残すことができず、あとは全部地主のところへ集められました。農家でもイモやカボチャや麦をご飯に入れて食べましたし、私たちも同じで、またカボチャだとかまたイモだ、と思って食べるような時代を過ごしました。

それでも、漆掻き職人は、オートバイを買ったり、現金を持っていたりしたので、他よりは良い生活ができたのかな、と思います。125 ccのオートバイ、普通の人には買えない値段でしたが、私は、漆掻きの仕事をしていたので、オートバイを買って山に漆を掻きに行きました。漆掻きも、はじめの頃は自転車で行っていましたが、自転車も、その頃、普通の人には買うことができない値段でした。

当時は、父のいとこ達が東京にいたので、そこを頼りにして漆を売ることができました。母によれば、父が漆を売って帰ってきた時には、リュックサックやトランクに札東の袋がたくさん入っていたそうです。母は、「ある時、父が、穴のあいた服で東京へ行ったところ、警察にばかにされたので、リュックを開けて「これ見ろ」と言って札東を見せたら、びっくりして警察が待遇をよくしてくれた。」という話もしてくれました。

漆は戦争前から売っていましたが、戦時中は、国へ漆を軍事資材として出さなければなりません。掻いた漆を全部国へ納めなくてはいけなかったのですが、高く売れたので闇でも売った人もおり、発覚して罰金を取られたこともあったといえます。漆は銃箱の内側に保存を良くするために塗料として使われていました。

戦時中、父の年齢は40代始め頃、私も10代だったので、二人とも戦争には行きませんでした。私より4歳年上の方は、ソ連へ行ったので、もっと戦争が続いていたら召集されていたと思います。また、父は漆を掻いていたので戦争へ行かずにすんだのではないかと思います。

戦後、父は漆を掻くだけでなく、牛も50頭くらい持っていて、農協が牛を貸すようになる前には、農家へ牛を貸していました。牛は肉用の短角牛の赤牛の子牛で、育てて市場で売って、繁殖用の元牛になる牛です。貸して売れば、4分を父が取り、育てた農家が6分取るようになっていました。夏には組合が持つ山へ放牧して、冬は農家で飼育しました。貸した牛が盗まれたり、死んだりしたこともありましたが、我慢して続けていました。父は夏の間は漆掻きで牛の世話ができませんし、それでも収入になったからです。農協が新しい制度で貸すようになってからは、借り手がいなくなってやめました。父は働き者で、漆を掻いたお金で水田や畑を買い、吉田家を守ってきたので、今でも私たちは満足に暮らしていけます。

妻の実家では、戦後一度に何人もが戻ったため、食べるものが不足して、開墾して畑をおこしました。その後、1950年以降から炭焼きをはじめ、炭を売って生活の足しにしました。

1960年代までは、漆掻きの仕事をしない冬には、私は、製材所の手伝いに行ったり、線路の枕木を交換する仕事をしました。それ以前は、冬の作業として、漁業をやっている人たちが使うウキ（アバギ・アバ）を作りました。漆のカラキ（切り倒した木）で、アバギを作ったり、キリアバギ（桐の木で作ったアバギ）も作りました。アバギは7、8寸くらいの大きさでした。今はビニール製になってしまいましたが、その前は木で作ったのです。二戸の福岡辺りの仲買人が、漁師へ売るためにたくさん買って行きました。漆の木をズンドリ（丸木の芯の部分を3尺くらいの長さの長方形に割り出すこと。）をして、それを向こうの人たちに売って、漁師が穴を開けて、適当な寸法を計ってこしらえて

網を付けて、それでいくつか垂らすのです。アバギの束をバーッと投げて、沖の釣りに使いました。魚がたくさん捕れた時代だったから、よく売れたそうです。その頃は出稼ぎに行かなくても良かったのです。

母のフクは、妻が嫁に来て3年目の時に脳卒中になり、その5年後に再発して55歳で亡くなりました。子供は7人いて、母が亡くなった後、私の一番下の妹の世話などが妻にかかってしまいましたが、上の妹達が手伝ってくれました。

妻は浄法寺地区の生まれです。地区の南の浄南ママ直（野菜直売所）の近くに実家があります。妻が嫁に来たのは1954年ですが、その頃、漆は売れなくなっていて、押し入れの中に漆の5貫目樽が15個ぐらい入っていました。売れなかった期間は1年位で、また高くなりました。

父は、漆掻き職人を、はじめは1人置いていました。次に、2、3人、裏目掻きのときには4人と人数が増えて、私も含めて、たくさんの人を父が使うようになりました。漆掻きの人は家に泊まって父と一緒に漆掻きをして、妻は食事の買い出しをしていました。漆掻きの仕事は、出稼ぎをするより高い収入だったのです。家にいた漆掻きの人たちは、お酒を飲んで絡んだり、仕事中に焼酎を飲んだりすることもありました。飲むのは簡単ですが、酒に負けて倒れてしまうこともあり、肝臓を悪くしたり、胃が悪くなったりした人もいます。

夏、妻は午前3時頃のまだ暗いうちから、母と共に一番朝早く起きて、漆掻きの人に弁当を作って持たせていました。母が亡くなったあとは、妻のことを妹達が手伝ってくれました。しかし農作業は妻が一人でやらなければならなかったから、大変だったと思います。

私の一番下の妹は、妻が嫁に来た時4歳で、母が亡くなったときは11歳でしたから、妻を親のように思い、私の娘とけんかすると「かあちゃん、私の言うことを聞かない」と言ったそうです。私の弟や妹は、私の子供と一緒に育てました。

私の兄弟姉妹7人のうち、1人は東京へ働きに行き、1人は柿ノ木平という所へ婿に行きました。5人が吉田家に残りました。漆掻きをしていたので、父は子どもたちを二戸の高等学校や洋裁学校へ通わせることができました。妹達は嫁に出して、我が家で結婚式もしました。次に赤ちゃんができれば助産所でお産させ、50日か60日預かって育て、婚家へ届けてようやく安心です。そして今度は私の子供達の番がきます。妻がずっと支えてくれたからできたのです。

父は、私の息子が中学生の夏休みに「おめえさ、刈り払いをするから山さあんべ（刈り払いするから、山へ行こう）」と言って、杉の木の下草の刈り払いや枝を切る作業に連れて行きました。息子は、300円か400円のお小遣いをもらって、お菓子を買ったそうです。山では「木はこういうふうにしなないと伸びない」とか、「手入れをしなないと伸びない」とか、そして「おめえが大人になる頃には、大きく育てて売るのがいいのだ」とか教えてくれたのです。

また、私の息子が高校を卒業して就職した頃、父が孫に漆掻きを教えると食事前に山に連れていきました。少しずつでも漆を採って、父も私もやった仕事はどういう仕事か、ということをお教えたのです。息子が初めて漆を採った時に言った言葉は「いやあ、じいさんもお父さんもよくこの仕事をやってきたものだな」でした。漆掻きの仕事は、ひとりで山の中でする孤独な仕事ですから、父がそういうことを教えてくれて、息子もそれを感じ取ってくれたことがよかったなとありがたく思っています。

水田と畑

この地区では焼畑はやっていませんでしたが、戦後に開墾したときにアラキオコシはしました。1954年頃、牧草を作っていたときは、春に山を焼いて、牧草の生えが良くなるようにしました。デントコーンも植えましたが、熊が来るようになると、作付けをやめてしまいました。今はなにも植えていません。

この地区は、小作人から米を集めている大地主がいたので、農地解放になって田んぼが小分けになりました。田んぼは5反歩から1町歩ぐらいが1人の持分です。

うちでは、水田と畑があります。畑では大豆とヒエを作っていますが、水田の方が面積は大きいです。田んぼがあるのは、県道のそばです。以前は、大豆は業者さんへ売っていましたが、今は自分が味噌などに使う分だけ作っています。味噌は長女のところに持っていき、逆にお菓子やおしょうゆをもらうことがあります。米は、全部商店に出しています。米は嫁へ行った娘や、水田を持たない兄弟にもあげています。また忙しいときには、農作業を手伝ってもらうこともあります。

水田や畑は1年作付けせずに放っておくと草が生えて大変なので、今年も作付けする予定です

山菜や胡桃や栗は山へ行って採ってきます。栗が落ちていればもったいないと思って拾ってきますが、子供たちも食べないのでたくさんは採りません。山栗は小さいですが味はおいしくて、採ってきて2日くらい日光にあてると甘味が強くなります。煮て柔らかくなったら、冷たい水に1回漬けてすぐに取り出すと渋が取れます。漆掻きのついでに山ソデコとかを採ることもあります。雨が降ったときは、夫婦で一緒にワラビを採りに行ったりします。ワラビは子供の頃に売って小遣いにしたりしました。最近では減反した休耕田などに植えたものを産直で売っています。

戦後、炭焼きしていた頃までは、コナラやミズナラなどのドングリを、「しとぎもち」にしておやつとして食べました。「シダミしとぎ」といいます。秋から初冬にかけて、ドングリをアク抜きし、粉にして米の粉を混ぜて作ります。そうしないと、乾けば崩れてしまいます。久慈では商品化しているようです。青豆のしとぎもちも、私の妹が作って、産直（キッチンガーデン）で売っています。今は全部機械で作るので、味噌のようになってしまいますが、彼女が作るしとぎもちも、同じ機械でも杵と臼で搗いているので、豆の粒が残っていておいしいです。昔、父親から豆を煮すぎないで豆の堅さが残るように作れと言われたのを守っています。

この地区には補助金で作った水車が、1968年頃までありました。水車小屋で豆をついたり、きなこを作ったりしました。母や祖母は、一冬食べるくらい2升も3升もきな粉を作り、ご飯にきな粉をかけて毎日食べていました。納豆は雪納豆といって、冬に大豆を煮て藁のツトに入れ、穴を掘り周りに藁をしいて、藁に熱湯をかけて冷めないようにし、藁のツトを入れて、雪を上からかけて、重しをして、3日くらいおいて作りました。

山林について

浄法寺地区の山林の多くは、杉を植える前は畑でした。1950年代に葉たばこ栽培をやる人とやらない人に分かれた時に、葉たばこ栽培をやらなかった人は、畑の地目を変えて杉を植えてしまいました。我が家では、畑に杉を植林する以前は、畑には豆やヒエや麦を植えていました。杉を植林する前、山にはコナラ・クルミ（オニグルミ）・ミズナラ・ナラガシワ・カシワなどが生えていました。

冬の炭焼きでは、ナラの木を使いました。炭にはナラが一番良く、ほかには広葉樹の雑木を使いました。雑木の炭は自宅用です。ホオノキやキリヤクリは材木として高く売れました。

ブナは、稲庭の方や奥中山などへ行かないと生えていません。ブナも炭にできますが、木は腐りやすいです。ここ60～70年でだいぶ少なくなっていました。ブナ林にはカツラなども生えています。

浄法寺地区では、戦争中に軍馬も飼っていたので、山の多くが草山でしたが、機械を使うようになってからは山林に変わりました。山に手をかけないと、その人の山は雑木が伸びて、「せっこぎ」（怠け者）と言われたものです。

吉田家の山林について

うちの山は約20町歩近くあり点在しています。父が漆を掻いて働いては山を買い、働いては田んぼ

を買い、働いては畑を買って、漆の稼ぎを全部資産にしてくれたのです。畑を地目変更して山にした土地もあります。当時は漆の木が安かったので、杉の苗を買って、大きくなったら使いたいときに使うようにと思って植林しました。これまでは杉を植える時代でしたからね。杉は、植えてから8年か10年ぐらいの間だけ下刈りして苗を大きくすれば、あと構わなくても大丈夫です。松は伸びるのが遅いし、周りのナラなどの方が早く伸びて強いから負けてしまいます。それと比べて、杉は育つのが強いから杉の方がいい、ということで、たくさん植えたのです。

山の木も売れば収入になるかと考えてきましたが、3、4年前から値段が安くなって、大きくなった杉を切っても、機械代を取られたり、経費だけかかってしまいます。そのため、ある程度高い値段で売られても、お金が山主に入らなくなっているのです。私が学校を卒業した時に山に植えた杉がありますが、間伐してもらって資源利用しようとしても、実際にはお金が入ってきません。

私が17の時に植えた杉も大きくなっていますが、ただ、あるだけで眺めているのです。だから、妻は山に行くのは好きではないと言います。私が「山へ行って（木を）見ればいいのに」と言うと、「いやあ、あの木がおがったの（育ったのを）見たくない、あれ見てれば涙がでてくる」と妻は言います（笑）。

杉を植えた頃は、大きい杉が1本で何十万もして、杉の木を何本も切って嫁入り・婿入りのお金を工面できる時代でしたから、たまげた（驚いた）ものです。1本でたまげているところは同じですが、今は売れなくなってたまげた（驚いた）のです。

この地域でも、樹齢何百年という杉の木はなくなりました。今、日本一の杉の木は、秋田の二ツ井にあるというので、旅行して見てきました。木はとても良い木でしたが、たくさんはないのですね。最後の3町歩くらいに、長さ50 mの木が残っていました。

私は、木を育てて世話をするのが好きです。暇があれば、今でも山に行って、ツルが絡まっていたりすると切ってきます。でも年ですので、山へ行ってあまり遅くなれば、妻は私の具合が悪くなったのではないかと心配します。

2018年12月22日補足インタビュー

2016年から漆を掻くことをやめました。漆掻きをやめたその翌年（2017年）の1年間は何もしませんでした。今は二戸市の地域協力隊や日本うるし掻き保存会の研修生へ教えています。二戸市の地域協力隊には、毎年2人から4人が来ています。はじめは「教えられるかな」と思いましたが、「教えなければ」と思えば頑張ることができます。漆を植えたところへも、ラクターに乗って、下草の刈り払いしてきます。5本か10本手入れしたら帰ってくるのですが、毎日行っていれば、やっぱり一通り、二通りとなります。それくらい山と漆の手入れが好きです。また、山へ行けば元気になります。弟も、「兄貴は山へ行けば元気が出てすごい。俺より速く歩くし、別人のようだ。」と言います。私は、自分の体が続く限り、山で色々手入れをやっていきたいと思っています。

第4章

漆掻きと漆の種苗作り

—大森清太郎さんのお話—

大森清太郎さんは、昭和22（1947）年生まれ。お父様は、漆掻き職人の故・大森新太郎さん（図4-1と4-2の写真参照）。大森清太郎さんは、15歳から漆掻きをはじめ、秋田県、宮城県、青森県を含む広範な地域で漆掻きを行ってきた。現在では、浄法寺漆生産組合の副組合長を務めていらっしゃる。さらに、大森家では、昭和40年代の終わりから漆の種苗作りをはじめ、最盛期には、年間で3万～5万本の漆の苗を植えていた。現在でも、年間で約5,000本を出荷している。今回の聞き書きは、漆掻きと種苗作りだけでなく、この地域における生業のサイクルとその歴史的变化、さらには、漆掻きにまつわるさまざまなエピソードについて、お話を伺った。なお、ここにまとめた内容は、2015年12月24日の第1回インタビューをベースとして、2018年12月22日に第2回インタビューを行い、両者の内容を統合したものである。作成した原稿は、大森さんに校閲をお願いした（羽生・伊藤）。

漆掻きの個人差

漆掻きの道具は、刃の付け方などを自分で合わせます。たとえば、カマ（漆の樹皮を剥ぐ道具）の曲がり具合は、自分で指定した型に鍛冶屋さんが作ってくれますが、それをさらに研ぎ澄ませて、角度を変えたりします。カンナ（漆の木に溝を入れる道具）も同じです。磨り減って、最終的にはこういう風にする、ということをお自分の頭に描きながら、毎朝、使う前に研ぎます。カンナは特注で作ってもらっています。

道具の研ぎだけでなく、その人の使い方によっても、減り具合が、部分的に微妙に違ってきます。こうした違いが、漆の質にも影響するようです。漆の香りも違います。

数年前に、うるし振興室（注：二戸市浄法寺総合支所地域課）の方と、石川県の輪島へ研修に行きました。輪島の工房では、その日その日によって、薬局と同じように調合して、乾きの早いものと遅いものをブレンドして使っていると聞きました。乾き方に差があるのは、私たちが漆を採取する時も同じです。雨が降ってくるなと思う時は、ものすごく乾くのです。天気があがり良くなってくる時には、少し乾きが遅くなります。その日のうちでも、ころころ変わります。午前と午後では全く変わってきますし、朝早くと夕方、日が暮れてからも、その都度が変わるような感じでした。1日で掻く漆の量は、太い木、細い木とありますが、最近は、一般に1日100本と言っています。私は、歳も歳ですから、1日70本ぐらいです。

掻いた漆は、朝と晩で多少質が違うものが混ざってきますが、同じ人が掻いた漆はトータルでは大体同じようになります。ですから、その人の漆の特徴は、毎年、似たり寄ったりの感じがします。特別に変わった漆ということはめったにありません。浄法寺漆共進会が行う品評会などを見ても、ほとんどがそうです。

研修生が掻いた漆は、最初はあまり個人差のない漆が採れるのですが、技術が向上するにしたがって変わってくるはずですが、漆掻き一年生の漆は、どこでも割と早く乾きます。漆掻きは、4日間で一巡、そのあと、また最初に掻いた木に戻って4日ごとに締めますが、間に休みを入れずに、早め、早めに掻いていくと乾きが早いようです。5日間から5週間を一周期にすると、乾きが遅くなる感じでした。そのほうが、肌の良い、いい漆になります。だから私は、毎日漆をとらずに、間で、草刈りや「カマズリ」（カマで樹皮を削る手入れ）をしたり、日当たりが悪いところの蔓を切ったりして、段取りのほうに手間をかけます。そのほうが、結果的には、質の良い漆をたくさん採ることができる

ように思います。

きれいないい漆とは、ゆっくり乾く漆ではないかと思えます。試しに、使っている人に聞いてみたら、やはりそのように感じています。

平成18（2006）年からは、家からの通いで、比較的近くで漆を掻いています。それ以前は、他県に出かけて、日帰りで片道100 kmぐらい、遠くまで出歩きました。早い時は、朝5時ごろに宿を出ました。朝6時少し過ぎに着いて、お昼までずっと、休みなしで掻き続け、帰りは、少し遅い時、夏場の日が長い時だと、夜9時近くになる時もありました。日が短くなってくると、帰宅はもっと早くなりました。

研修生は、文化財漆協会の木から採らせてもらっていると聞いています。文化財漆協会が国有地を借りて植栽しているところです。20ヘクタール余りあって、大きな面積です。

漆の種苗作り（図4-3～4-16参照）

漆の種苗を始めたのは、父の代からです。うちは、その前は、マツ、スギ、カラマツなどの針葉樹を中心としていろいろな種苗を手掛けていましたが、木材が安価になったため、昭和40年代の終わりから本格的に漆の苗を始めました。それまでいろいろな種苗を手がけてきた経験があったので、余り苦勞はせず、漆苗も初めからうまくいったように思います。当初は漆苗と桐苗の両方を扱っていましたが、昭和50年代の中ごろからは漆苗の専業になりました。

父が漆の種苗を始めたのは、二戸にある岩手県振興局林務部の担当の方から、「誰もやる人がいないのでやってみては」と勧められたのがきっかけです。当時はまだ、漆の植林が一般的に始まる前だったので、この辺で植える方はいませんでした。漆の種（図4-17）を播いて苗を作る専業の漆種苗は、うちが、戦後の日本で最初くらいだと思います。最初は少し悩んだのですが、なんだかんだで、文化財漆協会の団体が浄法寺で直接植栽を始めるということになって、それを見て、昭和50年代に入ってから近隣でも植えるようになりました。

種苗作りは、家族の皆で行いました。漆は除草剤に弱い樹木で、草むしりが大変なので、パートの女性にも手伝いを頼みました。スギやマツと違って、漆は除草剤を少し入れただけでも枯れてしまいます。漆は、野菜と同じくらい人手のかかる樹木です。

漆の苗は、だいたい2年で出荷できます。苗の大きさは30センチ前後から、長いと50～60センチの時もあります。漆の出の良い木を選んで採取した種を4月中旬～下旬に直播きして、秋に掘り取って仮植し、春にまた移植し、ほとんどは、その翌年の春（4月下旬～5月上旬）か秋（11月初旬～12月下旬）に山に移植します。この技術は、父が県振興局林務部の人たちと一緒に編み出しました。

最盛期には年間で3万～5万本くらい植えていましたが、現在出荷しているのは、1年間でせいぜい5,000本くらいです。今はもう以前の10分の1ですが、それでも余る時は余ります。

出荷先は、主に東北ですが、新潟などもありました。バイヤーやブローカーが間に入ったり、市の組合や種苗組合にまとめて出荷することもあるので、出荷先をすべて把握できるわけではありません。この地域でも、一戸町や、青森県の三戸、田子町方面も多く植林しているようです。

12月頃になると、ヤマドリやキジが漆の種を食べに来ます。また、ニワトリが食べた実を播けば、芽が出てくるといいました。今は、発芽させるために、うちでは漆の種を硫酸で処理しています。木灰（もくはい）を入れた熱湯も効果はありますが、発芽の時期にばらつきが多く、間引きの時に苗がそろわないので、手間がかかりすぎて大変です。

私たちの苗作りで一番大事なのは、いい土壌を作ることです。私は、有機肥料も、おがくずやパークではなく、わら堆肥のほうが優しく、育ちがいいと思っています。今は、ほとんどの農家がパーク堆肥で、木の皮とかあいうものを牛舎や豚舎に入れて使っていますね。鶏糞堆肥もそうですが、一

般には、わらはあまり使われていません。わらは牛などの飼料に回してしまうので、堆肥にはなかなか回ってきません。

生業の周年サイクル

文化財修復、特に日光東照宮の修復に国産漆を使うようになったため、ここ数年は、裏目を掻く人も何名かあったようです。漆が少し足りないので、裏目漆でも、使う側も売る側もいいことになりましたからね。私は、裏目掻きはほとんどやりません。秋は農家の仕事と苗の仕事、漆の種を採ったり、その他の準備があるので、裏目掻きができる月（注：10月）には、私は忙しいのです。

米作りと野菜作りはほとんど自家用だけで、販売用は作っていません。買って食べなくてもいいように、うちの家内が自分で作っています。それでも、秋には、わらなどの片付けなど、こまごまとした仕事があります。この辺の農家は、ほとんど、そうして代々暮らしてきたようです。

この辺は山国ですから、漆掻きの家にかぎらず、昔はいろいろな山の仕事もありました。春は植林、夏は下刈り、冬は伐採と炭焼き、などです。場合によっては山に小屋を建てて、冬場などは寝泊りをして働いたようです。炭焼きが終わったら、田んぼの苗づくりがあり、それが年間のサイクルになっていました。今は若い方々が入ってきていますが、漆だけで暮らしを成り立たせるのは難しいだろうと思います。

父は漆掻きを専門にしていたのですが、戦後から昭和50年頃までは、冬場は炭焼きをやっていました。家から近い自分の山で、おもにナラの炭を作って、木炭専門の仲買さんに卸していました。昭和40年代までは、そっちこちの山で炭焼きの煙が立ち込めていたものでしたね。冬場だけなら、一冬に300～400俵、一回に焼く炭は、一窯30～35俵くらいだったと思います。

ナラの実は、このへんの言葉でシダミ（ドングリ）と言います。うちのおふくろは、10年くらい前まではシダミをアク抜きして米粉と練り合わせて、「シトギ」（注：豆と米粉を練り合わせた菓子）を作っていました。チョコレート色をしていて、結構おいしいものです。シダミシトギは、今の時期、12月3日に、お稲荷さまにお供えます。昔はどこの農家でもそれを作って、神棚さんにお供えしました。今は、それをやれる人は少なくなりましたね。

シダミは、昔は、白で、トン、ゴトンと水車でやりました。昭和40年代までは、すぐうちの向かい、ここから150メートルくらいのところに水車があったので、そこにトコトコと行って、粉をひいたりしました。使えるのは当番で、今日は誰それ、明日は誰それと、いっぺんに重ならないようにしました。夜、夜中までね。冬場は水が凍って、水車が回りませんでした。水車は、ここの集落には二つありましたね。

漆の木の生育環境

漆の木は、手入れをして育てたものと手つかずのものでは、育ちの良さが全然違います。放っておいては、樹液はあまり採れません。手入れをして、若い葉がたくさん茂ればいい漆が採れます。手入れをしないと、土も貧弱になってきます。下草を刈れば、その草が腐敗して有機質の肥料になり、それを吸って木が育ちます。ですから、漆の場合は、特に下刈りが大切です。下草の根はそのままです。

私は、掻き採る最中に、少しだけ化学肥料を与えることもあります。普通の人には、あまりそういうことはしないのですが、そのほうが、木が元気になって、少しでも漆を出してくれるかなと思ってやっています。

昔は、畑の周りや、耕作している畑の中にも漆の木がありました。しかし、畑作業が昭和30年代後半に機械化されると、作付けの妨げになるので、漆の木を根から掘り起し、畑では育てないようになってしまいました。畑では鍬でいつも土を掘り起こしているので漆の木の成長も良く、当時のほうが漆

もよく採れました。木が軟らかくて、育ちもよかったです。

最近、里漆という言葉がありますが、漆の木は、もともと里山で育ったのです。今は、山の奥や標高の高いところでも、どこでもかしこでも植えていますが、やはり、育つ場所と育たない場所があって、適地があると思います。その見極めが難しいのです。

漆は春の遅霜にすごく弱いですね。土地柄によって、同じ標高でも、霜の薄く弱い場所に育ちます。

薪としての漆の木

うちの小屋には、薪として使うために漆の木を積んでいます（図4-18）。冬場は、台所で、朝から夜寝るまで薪ストーブを炊いています。薪は、ほとんど漆という感じです。

風呂は、2015年からリフォームしたので今は灯油ですが、以前は風呂も薪でした。薪風呂はすごく暖かく、芯まで温まって、湯冷めしなくていいのです。夜寝る時に太めの薪を入れておけば、朝まで火種が残っています。特に、ナラやリンゴは硬い木ですから長持ちします。

漆の木は軟らかいので、火力も柔らかいです。あまりピリピリしないのですけれども、一応、薪です。囲炉裏で漆を炊いていた頃には、漆の匂いがしました。今はストーブに煙突がありますから、匂いは来ないですね。

昔、うちのお袋がうちでお産をした時には、産婆さんが、煙でかぶれた、とか言っていました（笑）。私が子どものころは、いつも囲炉裏で焚いていて、雨降りの日は煙が蔓延して、目がトラホームになりました。最近では、トラホームはあまり聞きませんが、昔は結構あったのです。

どこの農家でも、囲炉裏の煙で目を悪くしたので、学校へ行けばペニシリンをガラス棒につけて治療してもらいました。今はあまりないですね。

父・大森新太郎とその家系について

漆掻きは、中学が終わったあとに、父・大森新太郎から習いました。私は12月生まれですから、15歳から漆掻きをはじめました。2018年で71歳ですから、56年目ということになります。

祖父・太郎は、馬を使って運送業を営んでいました。二戸駅からこちらの方へは荷物を運び、こちらから行く時には炭などを積んでいました。二戸からの帰りには、荷物の他にも、お店屋さんの魚や酒なども運びました。

ひいじいさんの大森利七も運送業でした。お酒呑みで、酒屋さんの前に行くと、馬がひとりで止まっていたそうです（笑）。馬もそこで一服して呑むと分かっている、酔っ払って馬車の上で寝ていても馬がひとりで馬車をひいて黙って帰ってきたそうです。ほとんど毎日でしたから、道は知っていたのでしょう。馬は本当に正直ですからね。馬のような心になりたいのですが、なかなかそうはいきません（笑）。

当時、馬車を買うには、今なら車を買うぐらいのお金をとられたので、運送業をやっている人は、そんなにいませんでした。馬があっても馬車がないから、やりたくてもできない人もたくさんいたのではないのでしょうか。その当時、明治の頃には、馬車は本当に大変なものでした。

私のうちが、この浄法寺管内で運送業の始まりだったと聞いています。秋田から馬車の鍛冶屋さんが来て、うちに宿をとって、注文を受けまして。もともと、浄法寺には、鍛冶屋さんも大工さんも、荷馬車をつくる技術もなかったようです。その技術が来て、ここで今度は鍛冶屋さんや大工さんが見よう見まねで作ったとききます。

その前の馬車のない時代は、木などは川に流して、二戸や八戸のほうまで運んでいたと聞いています。丸太に乗って、次から次にとびを打って（注：筏から鳶口で材木をひっかけて）、流したそうです。流すのにはそれなりの技術を持った方があり、若い人たちが跡を継いで、それがずっと受け継がれた

のでしょうか。肩書としては流しとかですね。いかだを組んだりしてね。

運送業は、私のひいじいさんとおじいさんがやって、うちの父・新太郎は、冬場に、たまに頼まればやるという程度でした。ですから、父の本職は運送業ではなく漆掻きでした。理由は、うちのおじいさん・太郎は樋口家から大森家に養子に入ったんですが、実の親父さんが漆をやった方で、それで漆をやらせろということになったそうです。やはり、外孫でも、継がせたいというつもりがあったのでしょうか。なりたくても誰でもなれるものではないですから。

父・大森新太郎は、割と何でもやれる器用な人でした。ですから、たとえ子どもでも、師匠の吉田市太郎さんに見込まれたのではないかと思います。実は、小さい時は背も低くきゃしゃだったので、どこかに頼もうにも、誰も拾ってくれる人がいなかったそうです。ところが、師匠の方の息子が途中で漆掻きをリタイアしたので、仕方なしに頼んできたのがきっかけだそうです。拾われてよかったのでしょうか。

この師匠の吉田市太郎さんは、隣の部落の方で、浄法寺でも一流の職人さんだったそうです。もともとは岡本の集落の方でしたが、息子さんは商いが好きで、八戸に居を構えました。その息子さんも漆掻きをしていましたが、やはり商いのほうがよくて、乾物の商いとか、あとはウチの移動とか引越しするのをやっていました。もう亡くなりましたけれどもね。

漆の木の特性と実の利用

漆の木が硬いか軟らかいかどうかは、掻く時だけでなく、見た目でも分かります。皮がカサカサしていたら、どうしても硬いですね。肌の見目がきれいだと軟らかい。手入れの仕方ですら異なります。傷つける時も軟らかいし、樹皮を落とす時も軟らかい。掻きやすいと効率もいいし、不純物もあまり入りません。不純物がたくさん入ると、酸化して黒くなります。

昔のように鋤で土を掘り起こしていた時のほうが、漆の木も今よりも良かったと思います。昔は、リンゴ畑のふちに、漆の木が結構ありました。リンゴ畑は日当たりの良いところにあるので、その周りの漆は、すごく元気がいいのです。肌もいいですね。津軽の大鰐や黒石の近辺にはこの辺からも漆掻きに行ったらしいですが、ほとんどがリンゴ畑の近辺だったと聞いています。

漆の木は、腐り難く丈夫なので、掻き取った後、垣根に使ったそうです。ブドウの棚などにも使いました。八戸の海では、アバ（注：網の浮き）という海の漁具に使ったようです。

木の実（漆の実）からは、昔は蠟を採ったと聞きます。終戦後のうちのおやじなどは、漆掻きの後に木を切り倒して、その漆の実を採って俵に詰めれば、1俵が当時の1日の人夫代ぐらいのお金になったそうです。その頃は漆蠟に使い道があったからでしょう。私らが小学校の時には、布袋に木の実を入れて講堂や廊下などの床磨きをやらされました。床がピカピカになったものです。

漆器の木地と八幡椀について

漆の木は漆器の木地にはあまり使いませんでした。この辺で、木地で一般に使ったのは、昔はハンノキでした。ハンノキは軟らかくて傷みやすいけれども作りやすい。使い捨てみたいなものです。話によれば、八戸のほうの漁師さんたちが番小屋で使ったそうです。

八戸に八幡神社があって、そこでお祭りがあります。そこに、こちらの安代あしろの中佐井という漆器の産地で粗末に塗ったお椀を、1シーズン、1カ月か2カ月使えば捨てるような安価な椀を作って売ったという話を聞きました。毎年、新しいものを買いかえたそうです。

これから冬場になれば、昔は、番屋さんに寝泊りして、スケソウダラとか、いろいろな魚を捕ったのでしょうか？ そういう時によく使われたとききました。この辺では八幡椀やはたわんとかと、昔は言っていて、そちらへ販売するための、初めからあまり手をかけない安価なお椀がたくさんあったそうです。下地

は柿渋で、虫が食ったりして、使っているうちに漆が剥げて、お湯が浸み込むようなものだったとい
います。今から思うと、本当にものがなかった時だったのですね。

地域の気候条件

暖かいところでは、リンゴや野菜がすぐに傷んでしましますが、ここは違います。寒いので凍って
しまうのではないかと思うかもしれませんが、少しぐらい凍っても、自然にもとに戻ります。地面に
埋めると、甘みが出ますね。うちでは、今でも、裏の畑にダイコンやニンジン、ゴボウ、ジャガイモ
などを、ほとんど全部、土の中に埋めています。穴を空けて、手を突っ込みます。ダイコンなどはす
ぐ甘くなります。ただし、たまにネズミが入っている時があります（笑）。納豆なども、昭和40年代
までは、雪室で雪の中に埋めて、雪納豆にしました。

こちら、太平洋側は、夏場もやませが入るので、夏場も本当に寒いんですね。冷害になって、米も一
粒もとれないという土地もあります。

10年周期ぐらいで凶作が来た時もあります。ここ数十年の間ですと、昭和55年、あとは平成5年、
平成15年がそうでしたね。その前も、昭和47～48年がやはり寒くて、お盆には綿が入ったものを着
て炬燵をしました。

雨は、漆の質を大きく左右します。ある程度、雨が多いほうが私はいいと思います。降った後は、
樹液が良く出ます。「毎日日照りで稼げたら」、と思うかもしれませんが、たまに雨が降っても別に休
めば休んだなりに木が余計に樹液を出してくれますから、いいのです。雨が降った後のほうが、水分
が少し多めになるので、漆の乾きはいいと思います。

漆掻きとハチやクマとシカ

漆の樹液を掻きに行くと、スズメバチの巣に遭遇することがあります。何回も刺されると免疫力が
落ちるので、私はクマよりハチのほうが怖いんです。刺されて寒気がしたこともあり、その時にはすぐ
病院へ駆けつけて、点滴や注射をしました。ですから、山歩きをする時には、吸入するのを持って歩
いています。ハチは、初めは少数ですが、だんだん働きバチがたくさんになって巣が大きくなり、駆
除するのが難しくなります。

ハチに刺されても、10分～15分以内に吸引すると、刺されたところをぐっと何回も引っ張って吸
い上げるだけで、よく効きます。ただし、髪の毛ですと、空気がもれるので効きません。ですから、
頭を刺さたら、「やばいな」と思います。

最近では温暖化の影響で、スズメバチも土の中に巣を作ります。上に巣を作れば見えるので、
自分で警戒したり早めに蜂スプレーで退治したりできますが、土の場合は、大きくならないとど
こにあるのか見つけられません。だから、とても怖いです。

クマ（ツキノワグマ）にも会います。クマには、唐辛子の熊スプレーというのがあります。最近
は、チェーンソーや刈り払い機の音にも慣れてしまい、あまり怖がらないようです。人がいることを知ら
せるには、鈴でも何でも構いません。やはり、子連れクマの親は怖いですね。小さいから、どうして
も気がつきにくいのですが、子どもがいたら必ず近くに親がいます。クマもやはり子どもがかわい
いから、それで襲われるのです。タケノコ採りなどで、この辺でも毎年、クマに襲われています。

このあたりには、イノシシはいませんが、カモシカとニホンシカがいます。シカは、角はありま
すが、人は襲わないと思います。ニホンシカがこちらに来たのは最近で、何年か前です。元は三陸のほ
う、陸前高田や釜石などにいたのが、津波が来る地震の少し前からこちらに来たようです。津波が来
るのを知って来たのかどうかは定かではないのですけれどもね。今のところ、このあたりでは、ま
だ漆の木に被害は出てはいません。でもニホンシカがたくさん出るようになると、これから被害が出

るでしょうね。農作物の被害も心配です。

他の地域の被害をみると、シカは漆の木に角をひっかけ、そこから木の皮を採ってしまいます。これがとても始末が悪く、全国的に、シカで困っています。今から30～40年前までは、ノウサギによる被害の方が多かったのですが、最近は、ノウサギは少ないですね。シカによる漆の木の被害は、北海道から九州まであります。北海道では、エゾシカですね。皮をとられてしまったら、木が痛んで、痛んだ場所だけでなく木全体が駄目になります。特に、被害がひどいのは北海道です。苗を直接送っている場所で、イノシシの被害は余り聞きませんが、シカにやられたという苦情は結構来ます。角をかけて、ぐるぐると皮をむいてしまいます。皮を全部取れば、苗が枯れてしまいます。漆の木がある程度育っていれば大丈夫ですが、木がまだ小さい若木で、2～3年から5年ぐらいの時は、結構やられるのです。シカは自分の縄張りをしているとか、いろいろな説がありますが、シカから聞いてみないと分かりません（笑）。

クマも漆の木を痛めますが、クマの数は限られているので、シカほど被害は大きくありません。それでも、クマが爪を立ててがりがりしますと、木にダメージがあります。標高が高いところの漆の木では、クマの被害がありますが、本数は限られています。ですから、クマの被害は、漆の木に対してはたいしたことはないですね。

最近は、あまり獣を獲らなくなったので、いろいろな害が増えました。昔は、獣といえば、キツネでもイタチやウサギでも毛皮を売買できましたが、最近はほとんど毛皮の需要がなくなってしまいました。今はタヌキでも何でも、捕りませんからね。

漆掻きの今昔

漆の器で出されると、同じものを入れても、もてなされたような感じがします。漆は、みんなに使ってもらうのが一番いいですね。例えば箸やお椀など、誰でも買えるような値段のものです。高級なものはきりがいいけれど、誰でも使えるような箸やお椀を日常に使うのが一番いいと思います。たんすの肥やしにするよりは、使うのが一番だと思います。

これから、漆掻きだけで生計を立てていこうとすると大変ですね。この辺では、漆掻きは、ほとんど農家の方がします。田植えが終わったら漆掻きをして、秋になったら田んぼの稲刈りなどの農作業をして、まず生計を立てます。

私は、昭和30年代の高度成長のころは、今の時期（年末）にはほとんどここにはいませんでした。農家や漆掻き職人の多くは、11月に入ったら、関東方面に出稼ぎでした。工事現場とかの出稼ぎは、ほとんどが4月ごろまででした。私はあまり行きませんでしたけれども、お正月にうちに帰ってきて、すぐとんぼ返りして。地元から関東に移住した親類縁者を頼って、寝泊まりして働いていたといっています。

この部落でも、昔は戸数の半分以上が出稼ぎをしていましたが、今は1人もいません。親子で出稼ぎしたり、あるいは夫婦で出稼ぎしたり、すごかったのです。吉幾三（注：演歌歌手）の実例だから（笑）。

暮らしは楽になったかもしれませんが、今は心が豊かでないような感じがします。昔のほうが、逆に心が豊かだったのではないかと思います。何を食べても、喜びが湧いてこないような感じですね。すべてのものに感謝する喜びを、大人も子どもも忘れてしまっている気がします。自然の恵みとかね。私は、そこが少しね。心の豊かさを持たないと、いくらお金を持ってても何もなりません。

やはり、大事なものは心ですね。人間はほかの動物と違うので、お互いに自分で持っている技術を、次の世代に伝えていきます。手先の器用な人は、それを生かしてみんなのためにすることが、自分のためにもなります。そうしてお互いにやっていたら、世の中も心も豊かになります。

大きな企業が入っても、結局、おいしいところはみんな持って行ってしまいます。やはり、自分のできる範囲で、自分の力で、苗でもやっているほうがいいです。大きな企業が入ってきて、一発花火で終わってしまっても、あとが続かないと何にもなりません。

漆掻きには、今、若い人が外から浄法寺に入ってきています。彼らがずっと続けて行くためには、地元の人たちの応援が不可欠です。少し時間はかかるかもしれませんが、土地の人に分かってもらって、相手がバックアップしてくれるような信頼関係を築くことが大事だと思います。

秋田から宮城、そして青森まで

私も、30年間、漆掻きでよそを回って歩きました。次の年に掻く木を探すのは11月から12月、農作業と山作業が全部終わってからです。雪がなければ漆の木は枝ぶりでわかりますが、雪が降ると、漆の木が見えなくなります。「岩手から来た漆掻きなんですけど、漆の木のあったところを知っていますか？」と聞いて回って、あそこに年寄りがいるからとか、あの人なら知っているんじゃないか、とか教えてもらいました。ハンターにもよく会いました。ヤマドリが漆の実を食べに来るので、ハンターは、漆の木の場所を知っているのです。

縁もゆかりもないところで、戸別に1軒1軒、「門付け」して歩いて、そうして聞いて、お年寄りなどから一生懸命世話になって回りました。そこまでいかないと、よそでは続きません。ポンと行っても、やはり相手から信頼、信用されないと、そこまでいきません。一言で門前払いです。その道を通った人でないと、口では好きなことを言うけれど、分からないと思います。

だから、私は歌碑を作りました。「渡世巡り 人の情けに 偲び泣く」(図4-19の写真)。現物は家の外にあります。「渡世巡り」という題字は、映画監督の山田洋次監督も使ったそうです。私も真似たわけではないんですが。東京にいるうちの弟が、「これは山田洋次のあれかな？」と言いうから、「いや、おれが自分で歌ったんだから」と答えました。字は私が書家の人に書いてもらいましたけれどね。

やはり、こうした歌は、自分でそれぞれ、そのような道を通った人でなければ浮かばないだろうと思います。別に私は作家でも何でもありませんが、知らない土地を回るというのは大変です。今の寒い時期も、泊まる場所もあてもなく、どこに行ったかといえば、お墓に行っていました。1週間も10日も、一人で集落の山奥のお墓泊りをしていたのです(涙)。

最近植林の漆ですから、軽トラに2人で乗っていき、同じところで息子と仕事をします。昔は足で歩き、次は自転車、それからバイクの時代になり、今は車の時代ですが、昔はずっと歩きました。

歩きの時代は、弁当を腰に風呂敷で結わえて、てくてくと歩きました。弁当を食べる手間も惜しんで、漆の木のそばで食べて、水も飲まずにいた日が結構ありました。一番困るのはのどが渇くことで、疲れが出ます。川の水から用水路の水まで、水があれば、何でもがぶがぶと飲みました。山に行っただけのどが渇くのが、一番つらいですね。

山では、不思議と迷いません。自分で探す目印を見て、山を見て、川を見れば、山を越えればどこかが分かります。山の獣と同じで、まず迷うことはありません。いっぺん通った道は、ほとんど忘れません。

100カ所ぐらいの現場を転々と回りましたが、一度回ったところは絶対に忘れません。ただし、ほかの人と一緒に回ったところは忘れます。人に案内されて見つけてもらった原木は、何も苦勞がないので忘れますが、自分で探したものは忘れないのです。今になって思うと、私は自分で覚えたものは忘れないけれども、先生から聞いたものは忘れてしまうのですよね(笑)。

回っている時には、目当ての漆の木を掻くだけではなく、それを元手にして、そのまわり一帯を探しました。そうして、ここが1日分とか、ここに70本とかまとめて、そこに行って一日過ごしたので

す。今日は気仙沼、明日は陸前高田という具合に回っていました。

岩手県から宮城県まで、釜石から南三陸の方まで行っていました。県の名前が違うだけで、よそ者扱いされました。宮城県に行ったら、そこの人たちにとっては、私たちはどこの馬の骨だか、海のものだか、山のものだか、わけが分からないのでしょう。同じ岩手県内だと、そういうことはありませんでした。人はそんなに差別されるのかと思います。

岩手では、父が、山田線を測量した伊藤佐平次さんにお世話になりました。その方が、宮古から岩泉までの山を全部知り尽くしていらしてね。終戦後、カスリーン台風（昭和22年）とアイオン台風（昭和23年）が終わったあとの頃です。

5～6年前までは、青森県の八戸、三戸や、十和田の奥入瀬まで行っていました。新渡戸稲造さんが掘った隧道の上のほうに行きました。そのあたりの漆は、もともと維新前後に植えたものかもしれません。

南部藩は穀物の取り高が少ないところでしたから、その殿様方が、例えば徳川などに献上するのに、漆もつけたのではないのでしょうか。伊達藩とか南部藩、津軽藩も含め、東北ではね。

虫害と山の幸

三戸のリンゴ畑の周りの漆の木は、農薬が飛んでいるせいか、ほとんど虫が発生していません。この辺では、最近、毛虫が異常発生しています。クスサンとか、いろいろな毛虫がいて、葉っぱを食べつくします。ああいう毛虫は、クリやクルミ、漆の木が大好きなのです。マイマイガも多いですね。昔はこんなことはなかったので、なぜこんなに毛虫が増えたのかは分かりません。

毛虫が葉っぱを食べつくしたら、その年の木の成長は止まってしまう、漆は作れなくなります。ですから、もう商売になりません。翌年に葉が出れば、その年からはまた漆が取れますけれどもね。

自然の山の幸は、たいてい1年おきの周期です。今年実をつけると、次の年にはつけません。ヤマブドウ、クルミ、クリなどの自然のものは、ほとんど1年おきの周期です。今年なったら来年は不作になる、という繰り返しですね。漆の実もそうで、1年おきの周期です。

クルミやクリは、昔はよく食べましたが、最近は採ってきても食べないので、あまり採りません。ヤマグリは小さくても、栽培のクリよりもおいしいです。クルミもオニグルミのほうがおいしいですね。

漆にはオスとメスがありますが、木を見ただけでは、私にはその区別は分かりません。実がたくさんつけば、漆の出が悪いですね。ですから、つかないほうがいいです。でも、実がつくつかないかは、木を買う時点では分からないので、実をつけた木でも、樹液は採ります。オスも、花は咲きますが実はならない。ヤマブドウなども同じですね。

冬場は山を歩けないので、来年の木を買うのは秋のうちです。木を買う時期はだいたい年末までで、前の年のうちに、原木を準備するわけです。

木を選ぶ時には、太さとか、いろいろ条件を考慮します。条件によって値段もバラバラになります。だから、早く買ったほうがいいのですが、お金を出さないと買えません。1本で1,500～2,000円、太い木は3,000円ぐらいでしょうか？ 私が一人で掻き取る分としては、一年に250本～300本足らずでいいと思います。

その年に掻ききれなかった場合は、地主さんに話をして、今年は無理ですから来年にしてくださいと頼み、置かせてもらいます。地主さんと気が合えば、今度、また掻いて欲しいと電話が来ることもたびたびです。

最近掻く木は、植えてある木だけです。二代林や三代林（ひこばえから育てた二代目や三代目の林）ではなく、種苗から新しく植林した木がほとんどです。ひこばえから育てた15年目ぐらいの木も、

あることはありますけれどね。

将来、どれぐらい漆を掻き取れるか分かりませんが、あまり一度に乱獲するとあとが続かなくなりますから、その辺のところは難しいでしょうね。漆の木は、今のところは十分ありますが、結局新しく植えていかないと、だんだん途絶えてしまいます。そこが問題です。いくら計算をしたり調べたりしても、先に植えて育てていかないと安定した漆の量が出ていきません。私などは、苗木を出荷していますから、一番分かるのです。10年、15年先が見えていますから。

掻き採る人が多くなれば、結局、乱獲で終わりです。逆に、掻き採る人が少なければ、例えば5～6人であればずっと継続していけますが、20人とかで毎年掻き採るだけの量はここにはないと思います。木々が、全部が全部育つわけではありませんからね。役所の人たちには、その辺りのことをしっかり考えていただきたいです。

牛でも同じです。原発事故の後、福島辺りでは大きな被害が出て、牛が置けなくなって廃業したときいています。この辺でも原発の影響で廃業がたくさんあって、仔牛が足りないとのこと。だから、今、黒い牛（黒毛和牛）の仔牛は60万～80万円もするといいます。以前は、平均35～36万ぐらいだったから、倍以上です。赤牛、つまり短角牛でも、今は平均45～46万ですね。前は15～16万すればいいほうで、20万はしなかったですからね。つまり、ものがないのです。ブロイラーなどのニワトリだと、卵からすぐ孵化してあつという間ですが、牛だと3年も4年もかかりますからね。短角牛は、夏山冬里といって、夏は山へ入れ、冬は里で飼育しますが、元になる仔牛がいないと、牛を飼いたくても飼えません。

漆の植林、および青森との交流

昔、漆は畑の周りに植えられていましたが、今では、法律上は耕地には木を植えてはいけないうです。農地を転用して山に直せば構わないのですが、農地で、野菜を作っている隣を林地にしたら、邪魔になるでしょう？ 木が伸びると日陰になりますからね。だから、周りに葉タバコやリンゴ、キュウリなどの野菜をつくっている畑があると農地転用はできないわけで、別の承諾書が必要です。少しぐらい邪魔になっても、隣が我慢して黙っていればそれで済みますが、本来ならば、畑に植えることはできません。ただし、二戸管内では、最近、県による特例で、農地に植えても良いとのこと。

青森県内などで、リンゴ園のあと地に漆を植林する例はあります。リンゴ農家の人たちも高齢化で、辞める人が多く、3分の1以下になってしまっています。

昔、戦前や戦後の頃は、この辺の漆掻きさんたちが、津軽へ漆を背負って売りに行きました。自分からね。向こうから買いに来た人もあるし、逆にこちらからも売りに行くこともありました。うちのおやじも行きました。自分だけでは抱えきれませんから、お金を払って人を雇い、その人と行って一晩泊まって帰ってきたといいます。その当時のことは、私もちらりと子ども心に覚えています。お札が100円札でした。当時、漆10貫目が15万円もしていました。100円札で15万あったら、リュックで背負うぐらいいっぱいのお札だったのです。売るのは、問屋さんとかクロメ屋さんで、今はもう廃業されている、もともとは上方から来た津軽のAさんのところに、よく持っていっていたようです。

農業と味噌などの加工品

畑で作っていたのは、ヒエと麦、あとは大豆と小豆が主でした。麦を刈ったあとに小豆を植えたりしてね。連作はしないように、できるだけ交互にしました。この辺は、やはりヒエが多かったですね。ヒエと麦の割合は、それぞれのうちによって違いましたが、うちでは一割ぐらいはヒエ、あとはお米で炊きました。家によっては半々だったり、丸々ヒエのところもありましたね。麦飯も良く食べました。それだけ食料がなかったんです。

昭和40年代の中頃～後半に減反が始まる何年か前までは、早場米には奨励金が出ていました。うちのおふくろの昔のおじいさんの時代には、ご飯が膨らむので、古米の方が旅館などに高く売れたそうです。今は逆ですね。

小麦は、ほとんど、どこの農家も作っていました。お煎餅も、昔は、麦と物々交換だったのです。お店屋さんには麦を持っていき、煎餅と交換。お豆腐屋さんには豆を持って行って豆と豆腐を交換。パン屋さんでもパンと麦を交換したり、お金ではなく、物々交換でした。

うちでは毎年、自分で、釜で豆を煮て、「手前味噌」(笑)を作ってきました。私は、買った味噌、添加物が入っているものは好きではありませんからね。

味噌作りには、米麴を入れます。大豆も、少しだけですが自分で作ります。自分で味噌を作るのに、せいぜい一斗、まあ20リットルもあれば十分です。

カビをはやした味噌玉、あれは少し匂いがしますが、昔はこの辺でも、どこのうちでも軒下にみそ玉を吊るしていました。すごく色が濃いし、匂いもそれなりの匂いがあるので、分かって食べるのならいいのですけれども、少し慣れないとね。

お煎餅屋さんは、現在でも、2軒残っています。昔は、お煎餅屋さんとか、豆腐作りのための「にがり屋」さんとか、たくさんあったのです。お菓子屋さんも手づくりのお菓子屋さんで、何でも地元でまかなえました。最近は少なくなって、廃業した店が多いですね。豆腐屋さんも、今は浄法寺に1軒だけしかありません。昔は、どこにもかしこにもいっぱいお豆腐屋さんがあって、豆腐だらけだったのです(笑)。何かあれば、冠婚葬祭では、必ず豆腐を作りました。

牛は、平成12年まで飼っていました。はじめは馬、次が短角という赤牛、その後が黒毛和牛ですね。短角だと夏山冬里で、夏場は山に放牧しますが、黒の場合にはうちで飼ったので、たいへんでした。

人口は減っていますね。昔と違って若い人がいないので、どこの家庭でも消費が少ないのです。昔は、サツマイモなどは俵で2俵も買って、それをふかして食べていました。今はもう2～3本買って来るだけです。お魚も箱で買いました。スケソウなどは、1回2～3箱買って、軒に吊るして干して食べたのです。棒ダラにしてね。

子どもの頃は、八戸から来たホッケ、サンマ、イワシ、イカなどは、穀物と物々交換でした。たとえばヒエ40キロがイカ2箱とかね。トラックに積んで、ばら売りではなく、箱売りでした。寒くなればほとんど生で来て、タラもイカも干物を作りました。ニシンも生で来ましたね。昔のニシンは今と違って大きくておいしかったのです。

川遊びと川の幸

子どものころは、学校帰りは時間もあったので、一生懸命川遊びをして、ウグイやカジカなどを捕りました。ご飯のおかずです。子ども同士で、河原で火を焚いてその場で焼くこともありました。

この辺では、ドジョウ掬いもして、柳川も作りました。お酒を入れて煮て、卵を入れてね。ドジョウはたくさんいて、うちの前にもいました。女の子は、あまり川へ行きませんでした。魚を捕るのは、男の子が多かったです。

私の苗畑では、コンクリートで二つ溜池をつくっているのですけれども、そこにサンショウウオが住みついて、これが孵化しているのです。かわいいですね。数珠になった卵をいっぱい春先に産むのです。

海外との交流

漆の出が良い木を切ったあとに、薬(ひこばえ)が出てきて次にそれが大きくなるのは15年後くらいです。同じ遺伝子ですから、前の木の特徴を引き継ぎます。

イギリスに、私の漆の苗を5本ほど、Wさんという東京芸大を出た作家の方が寄贈したのです。平成13年か14年ごろでしたね。確か、キュー王立植物園に植えてあります。日本の原種が欲しいということで、送って差し上げました。

それから、文化財漆協会の会員の女性の方で、一生懸命、海外での漆の補佐で、ミャンマーとかブータンに行っている方がいます。ブータンで研究をしているそうです。浄法寺での漆掻きの研修にも、何度もいらしています。私にもあちらに来てほしい、とか言われました。苗を育てて漆を採っている人がどこにもいないようで、私みたいな人に来てほしいと言われたんですが、そこまではね。私は、うちにいるのもやっとなものですから海外には行きませんが、彼女は今でも結構足を運んでいるようです。

漆と林業のこれから

自分で植林した漆の木も、10年に一度くらいは掻いています。比率からいけば一割にも満たないんです。里漆ということばがあるように、漆は、つる草を切ったり下刈りをしたりという手入れが大事なのですが、漆掻きをする人は、私も含めて、なかなかそこまで手がまわりません。ですから、漆掻きの掻き子さんと、自分で植林をしている人はほとんどいません。文化庁の方針で文化財の修復に国産漆を使うことになって、漆の値段は上がりましたが、漆器そのものの売上げが上がっているわけではないと聞きます。そして、今は、漆を採る量に木が追いついていない状態です。今植えた漆がすぐに掻き取れるわけではなく、そこから漆が取れるようになるのは15～20年先です。ですから、現在の供給量をこれからもずっと維持していくのは難しいと思います。

漆の木を含めた森林の管理は、長い目で見るのが大事です。岩手県全体では、毎年2,000ヘクタールの森林の木を伐採していますが、植林しているのはわずか600ヘクタールほどにすぎません。そして、スギやカラマツ、アカマツなどを伐採したところには、広葉樹は生えてきません。価値のない木ばかりが生えてくると、山は荒れて、災害も増えます。私が子供の頃は、山奥にはブナの林があって、椅子やピアノにもブナ材が使われていました。国やお役所の森林・林業政策も、漆の植林も含めて長期的な視点が必要のように思います。

第5章

産地直売所「キッチンガーデン」について

—小野知子さんのお話—

小野知子さんは、二戸市浄法寺町海上前田に所在する産地直売所「キッチンガーデン」（図5-1～5-6の写真参照）の副会長。ここにまとめた内容は、2015（平成27）年12月23日のインタビューをベースにして編集したものである。作成した原稿は、小野さんに校閲をお願いした（羽生・伊藤）。

キッチンガーデンの概要

キッチンガーデンの組合員は39名です。皆が、旧浄法寺の町内です。ここは葉タバコの産地ですので、組合員の中でも葉タバコを栽培している人が多く、タバコをやりながら野菜もつくっている感じです。今月（注：2015年12月）の17～18日で出荷が終わり、数日ゆっくりして、これからみんなが出てくるという時期です。今年のタバコの出来はよかったみたいです。

組合員が今の時期につくる野菜としては、ハクサイ、キャベツ、ネギ、ダイコンなど。葉物はホウレンソウ、コマツナ、ミズナと結構種類はあります。ここはハウスを使ってありますから、3月ぐらいまでこれからずっと葉物があります。

野菜は女性の人たちが中心につくっています。ですから、売上は奥さんの名前の通帳になります。何人か、お父さんのものになっている人もあるかもしれませんが、ほぼお母さんの通帳に週1回振込があります。1週間の売上をまとめて振込します。月4回です。

収入としては1週間でだいたい2～3万円から、多い人で5～6万円です。夏場ですと1日1万円ぐらいになる人もあります。私は、野菜は少力で、あとはあんこ入りのまんじゅう類などの加工品が中心です。

漆と産直組合とのかかわり

組合員さんの中で、ご主人が漆掻きをやっていたらしゃる人はいませんが、私は漆染めをやっています。漆の木の中の芯の黄色い部分だけを乾燥させ、削り出して、煮出して染めるという、草木染めみたいな感じです。スズとか鉄とか銅とかの媒染剤を組み合わせると、いろいろな色に染めています。春からここ（キッチンガーデン）に置こうかと思っているのですけれども、今は、天台寺の滴生舎とかに置いてもらっています。漆染めをやっているのは、私のほかにもう1人いて、全部で2人です。

漆染めの木は、切り倒したものを譲ってもらいまして、それを乾燥させます。そんなにたくさん使うものではないので、まだ何年分かあります。木をもらうのは、うちの近くのMさんです。漆掻きをしている年配の方です。木が1本あれば1回分ですから、ハンカチにして40枚ぐらいです。

漆染めをはじめたのは十数年前です。浄法寺で、漆で特産品をつくらうということで予算をとって募集があり、先生を呼んでもらい始めたのがきっかけです。最初は10人ぐらい。そして勉強会を始めたのがスタートです。でも、それから人数がだんだん減り、2人だけになってしまいました。そんなに売れるものでもないのに、仕事になるぐらいのお金が入るわけではありません。だから、商品がなくなりましたら仕事をするという感じです。

組合員も含めて農家が持っている山に漆があつたりして、漆掻きの人は、そこに掻きに来ていました。うちでも、昔は1本300円とかで売っていましたがね。でも、今はあまりなくなりましたね。昔は、畑の周りとかに植えていました。産直ができたころまでは、まだありましたでしょうか。今は造林をして、きちんとやっていますから、ありませんね。

家の畑について

うちの家業は農家ではなく、塗装業です。しかし、食べる分の野菜づくりはずっとしていましたが、産直と一緒に入りたいと思い、参加しました。畑は3反分ぐらい、うちの実家のほうを使っています。実家は農家でしたが、今はプロイラーをやっていますから畑は使っていないんです。

野菜は、実家で食べる分もあわせて、2軒分つくっています。産直に入っていないなくても、ほとんどは、家で食べる分はつくっていますね。ただし、タバコをやっている人たちは、ジャガイモは近くに植えられないといえますから、それは作れませんが。あとは食べる分はほとんどつくっています。もっとも、タバコをやっている、自分でつくるよりここに来て買ったほうが良いというお客さんもいます(笑)。タバコ農家は、結構反別(注:田畑の面積)が多いので、野菜をつくっている暇がないと思います。この浄法寺から山のほうに入ったほうは反別が多く、1軒のうちで何町歩とやっています。

キッチンガーデンの顧客層

キッチンガーデンに来るお客さんは、浄法寺の町以外では、盛岡や秋田鹿角、青森八戸方面から車で買いに来る人も多いです。天台の湯に来るお客さんが、三戸や二戸からマイクロバスで来ることもあります。お風呂に入って休んで、帰りにここへ寄って帰るみたいです。日帰りですね。バスが無料なので、入浴券を買って、マイクロバスに乗ってきて、一日ゆっくり休んで帰るといいます。二戸市内の人も結構来ます。

キッチンガーデンのお客さんがいちばん多いのは、午前中10時から12時ぐらいです。近くに、月曜日を除いて毎日、デイサービスがありますから、そこに来るおばあさんたちが結構来るのです。お昼の時間はなぜか少し空いて、そのあと2時から3時ぐらいまでです。平日と休日では、休日のほうが結構多いです。

盛岡や八戸からわざわざ来る方のお目当ては、やはり野菜ですね。スーパーで買えば日持ちしないのですが、ここの野菜は、朝、採り立てを置きますので日持ちします。値段は最初から100円です(図5-4)。あとは、いくらか量で調節しているみたいです。ない時期は量を減らし、たくさんなれば、本当にたくさんなるのです。ハウレンソウなどは1kgも入っているときがあります(笑)。冬場は200~250gです。

産直立ち上げの経緯と歴史

キッチンガーデンの産直ができたのは、平成8年です。もうすぐ平成28年ですから、だいたい20年になりますね。10周年の時には、役場や普及所などを呼び、食事会をしました。

キッチンガーデンの組合員の年齢は、平均年齢にしましたら、若いほうだと思います。70歳を過ぎている人が4~5人いますが、50歳代~40歳代もいます。

売れ行きとしては10年前、20年前とくらべて、いくらかは伸びています。年4回のふるさと宅配は、最初は、町内の特産品を送っている役場のほうでやっていました。それをここへ来てから、こちらでやってみないかということで一緒にやって、そのあとで、それをキッチンだけでやることになりました。何年になるのでしたか、結構、お客さんは60人から70人ぐらいはいます。増えたり減ったりはしますけれども。

ふるさと宅配の送り先は、町内から出た人と、口コミによる都会の人です。仙台もありますが、やはり、東京が多いでしょうか。あと、インターネットにつながっていますから、それを見たという人も中にはいます。年4回で5月、8月末から9月、今(12月)と2月です。春は山菜で、夏場はトウモロコシのできた時期です。秋と今は、まず秋野菜やクリスマス用などのものです。2月は干し大根などの乾物類です。キャベツ、ハクサイも入ります。冬場には、キャベツ、ハクサイのほかに、リン

ゴ、そば、漬物など、結構品数が多いです。年に4回という、定期で決まったものがありますと、その分、安心して計算に入られます。

年4回の宅配は、1回分で送料込みの2,500円、お客さんから年1万円いただきまして、4回送ります。採算はそれなりですが、お任せ宅配ですから、向こうで選ぶのではなく、こちらで好きなものを詰めるというものです。役場からの補助はありません。ずっと最初からつながっている人もあります。誰も止めるとは言いませんし（笑）。楽しみにしてくれていますので。

産直ができる前、私たちには、4Hクラブ（農業青年クラブ）と生活改善グループというのがありましたから、その中で結構、よそを見て歩いていました。その結果、自分たちにも産直が欲しいと言ったのが私たちの年代です。結婚した頃ですから、30代ぐらいでしょうか。そうしたら、たまたま、町のほうで事業があるからやってみるかということになりました。建物は町のほうで建てて、ここを借りて入って組合員を募り、平成8（1996）年5月にオープンしました。声を上げていったのは女性です。最初はそんなに量が多くなかったのでよかったのですが、だんだん量を作るようになりますと、家族の手伝いも必要になりました。主人も上手に巻き込む（笑）。ほとんどの人は夫婦でやっています。じゃないと、一年を通じて野菜をつくるのは大変ですからね。収入はお母さんの通帳に入りますけれど、おばあちゃん、おじいちゃんたちがいる人は、年末にいくらかはおじいちゃん、おばあちゃんにお金をあげているみたいです。子供たちも手伝ってるみたい。一家総出ですね。

売上げとその使い道

ここは、当番が2人ずつ入るから、年間を通して18人くらい、当番費を最後にいくらかもらいます。その中から1万円積み立てまして、4年間積み立てましたら、大きな旅行をします。去年は宮古市の浄土ヶ浜、その前は札幌にも行ってきました。葺き替えがありましたときに伊勢にも行ってきました。みんな楽しみにしているのです。男性も入っている人もいますが、大部分は女性です。1万円の積み立ては、4年間だと4万円で、足りない分はキッチンの持ち出しで遠くに行ったりします。あとは年1回、2月に総会がありますから、1泊泊まりとか日帰りとかは必ずやっていました。それはキッチンの経費です。

キッチンの経費は売上げの一割、キッチンの売上は、年間5,500～5,600万円くらいです。一番売上あげる人は400万円くらい、次に300万円が2人くらいで、あとは200万、100万円以上と続きます。それだけありますと、楽しみもあります（笑）。

キッチンガーデンの年齢構成

産直ができて、暮らしが忙しくなりましたね（笑）。毎日休むことなく、土日もなく、自分が好きなときに今日は休もうかという感じです。休みは決めていないけれど、土日はお客さんが来ますから、休めません。

組合員で一番若い方が、43～44歳くらいです。若い人は、ほとんどが出ていってしまいますね。高校が終わると、みんな東京や仙台の大学に行き、帰ってくる人は少ないです。仙台ですと、新幹線で1時間なので、行き来もそんなに難しくはありません。若い新しい人たちが入ってくればいいのですが、なかなか難しいですね。葉タバコも多いので、そちらを辞めてという人は、今のところはありません。

タバコの栽培の方は、若い人も少しはいますが、たくさんではありません。20代でも手伝っている人、勤めながらの人もいます。タバコ農家は50代、60代も多いので、その人たちが働けなくなりましたら、もうやめるしかないのです。

産直では、野菜を作れば、70代でも、電動カーに乗って積んでくるおばあちゃんたちもいますか

らね。

野菜や加工食品の作り方と季節

葉タバコは、一年のプロセスにきちんと規定があって、どれだけの肥料をして薬をかけて、というのが、全部決まっているようです。野菜のほうの肥料は、自由です。禁止されている薬を使わない限りは大丈夫です。農薬は使いますが、きちんと規定に沿ったものを使っていれば大丈夫です。薬の勉強会は、2年に1回ぐらいは普及所を呼んでお話を聞いたりしています。この辺は、そんなに薬を使わなくても大丈夫ですから。無農薬というほどではないですけども、低農薬です。最小限の薬です。

今年は、雪が少なく、こんなには初めてです。普段だと、今ごろは30 cm～40 cmはあるのです。今年は正月まで降らないみたいですから、ラッキーだけれども、どうなるのでしょうかね。こんなに暖かいですと、今の時期に作るものが作れません。干しもちなどは凍らないと、マイナス7℃ぐらいにならないと作れません。

去年は、もう今ごろは40 cmぐらいあったのではないのでしょうか。しばれたしね。今ごろから干しもちをつくったのですけれども、今年はもうねえ。1月を過ぎますと暖かくなりますから、いくらしばれても駄目。日中が暖かくなりますと干しもちはできません。1月の中ごろまでしばればできるけれども、だから今年は大変だねと言っています。

農作物は、いくら雪がないと言っても、今、作るわけにもいきません。だからこうなったら、今年の葉物は3月まで持つかなと言っています。伸びてしまい、春になくなるのではないのでしょうかという心配があります。暖かくていい、と言っても大変なのです。雪かきをしないところはいいところですが。これから、来年の夏はどうなるか。

今年、キャベツがよそで高くなった時には、うちのキャベツがすごく売れました。安いですから。高くても120円です（笑）。いくら、ほかが高くても、そんなには高くはしません。ですから、組合員は、みんな残さないで売ったみたいです。

山の利用

39人の組合員のなかで、林業をやりながら農業をやっている人はいません。ほとんどの組合員のうちでは、山林を持っていますが、木を切ったり植えたりするのは、森林組合に任せることが多く、林業だけで生計を立てている家はないですね。シイタケについては、ブロックの菌床で栽培している人が1人います。キクラゲもブロック栽培です。マイタケは、この産直の組合員が何人か作り、9月の中ごろにはドサリと出てきます。

山菜は山で採ります。ほとんど自然のもので期間も短いですし、その時期のもので、何がとれるか分からないのです。皆、結構採りますね。ワラビやフキも採って塩漬けて、今の時期に出します。ほとんどは、自分の山です。

タケノコは岩手山の麓や稲庭の辺で採ります。あとはほとんど近くの山でワラビやフキとかですね。キノコも同じです。キクラゲはブロック栽培です。

米、雑穀とタバコ

組合員の多くは、田んぼやタバコを家族で作っています。田んぼもあるのですけれども、面積にしましたら、タバコのほうが多いのではないのでしょうか。今年は、タバコが結構、いい値段で売れたみたいで、喜んでいました。

米は、タバコよりも1反分の作付面積に対する単価は安いですが、でも、組合員の人たちはここで売っていますから、業者で売るよりはいいみたいです。金額設定は自分でします。お米の値段が、他で高

くなくても安くなくても、ここはそのままです（笑）。品種は、主に『あきたこまち』と『いわてっこ』。あとは何かな、それぐらいでしょうか。精米で出しています。精米したては全然食味が違います。精米をして何カ月も置いてはいないですから、おいしいのです。

浄法寺の葉タバコ栽培は、早くから始まりました。うちのおじいさんたちが早くて、初めにタバコを始めたのです。私が中学校卒業のころにはやっていたから。昭和39年に中学校卒業ですから、そのころはもうやっていました。20年ぐらい前は最盛期でした。町内だけで20億とか25億とか売れた時期でしたから。それからだんだん、辞めればいくら出るとかで公社のほうで減らしてきましたから、結構減ってきています。あと高齢になり、辞めてきている人もあります。産直を始めたころは最盛期ではなかったでしょうか。

葉タバコ農家は今でも多いですね。タバコの最盛期は、皆さん大きな収入がありました。反別が1反で50万円としまして、6町歩ですといくらになりますか（笑）。1反分50万円出しまして、1町歩ですと10をかければいいですから、そのまた6かければいいのでしょうか。でも、今は、町内では、4～5町歩やっている人が一番多いのではないのでしょうか。

今年は1反50万円くらいでしたが、安い時期もありました。けれども、安くても40万円程度ですから、そんなに下がらないのです。ですから、皆、タバコを続けていけるのです。夫婦、二所帯で働いているところもあります。家族ぐるみですから、家族4人ぐらいのところですね。夫婦2人だけというのは少ないのではないのでしょうか。そうすると、忙しいときは人を頼んでやっています。休みはやっぱりないですね。

タバコは、3月に種まきをしまして、4月の末か5月に植えます。7月から採り始めまして、9月末までの2カ月はもうびっちりタバコを採りまして、そして調理をして、今の時期に出します。年間、2カ月休むか、休まないかです。ここの産直の人でも7～8反やっていますから、一反50万円としまして50×8で400万。タバコで400万は稼いでいるはずですよ。少ない人と言いましても、2～3反やっている人はそんなにないのです。8反から1町歩やりましたら、500万～600万円になります。ですから、忙しくても辞められないのですよね。家がタバコをやっている人は、産直の稼ぎは200万円ぐらいですかね。でも、それが大きいのですよ。

今は何をするにもお金がかかるので、田んぼだけで、というのは少し大変ですね。田んぼは、なかなか、ほかに用途を変えるというわけにもいかないしね。ソバは水が入れば駄目ですし、そんなに売れるわけでもありません。あとは雑穀ですが、雑穀は安いですからね。最近、農協さんでイナキビとかに取り組んでいますから、雑穀類はいくらかはやっていて、組合員はここでみんなさばいています。全部さばけているみたいです。買うのは若い人です。夏場ぐらいには売り切って、秋にまた新しいのが出ます。

著者プロフィール

中静 透（なかしずか とおる）

所 属 総合地球環境学研究所

専 門 分 野 森林生態学

研究テーマ 地球環境、森林動態、生物多様性、グリーンインフラ

主な著作

「地球環境と生態系の長期変動を明らかにする」（日本生態学会編『地球環境問題に挑む生態学』文一総合出版エコロジー講座4、2011）、「生物多様性とはなんだろう？」（日高敏隆編『生物多様性はなぜ大切か』昭和堂、2005）、『森のスケッチ』（東海大学出版会、2004）

羽生 淳子（はぶ じゅんこ）

所 属 カリフォルニア大学バークレー校人類学科、総合地球環境学研究所

専 門 分 野 考古学、生態人類学

研究テーマ 食の多様性と定住、文化変化のメカニズム、長期的持続可能性

主な著作

“Ancient Jomon of Japan”（Cambridge University Press, 2004）、「縄文時代の食と環境」（『科学』87-2、2017）、「Handbook of East and Southeast Asian Archaeology」（共編著、Springer, 2017）、『やま・かわ・うみの知をつなぐ』（共編著、東海大学出版部、2018）

伊藤 由美子（いとう ゆみこ）

所 属 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ

専 門 分 野 考古学、生態人類学

研究テーマ 環境考古学、生業の多様性と社会変遷

主な著作

「青森平野西端部における低湿地型貯蔵穴を備えた縄文集落の変遷について」（『青森県立郷土館研究紀要』第37号、2013）、「縄文時代の自然環境」（青森県史編さん通史部会編『青森県史通史編1 原始 古代 中世』第二章第一節2項、2018）

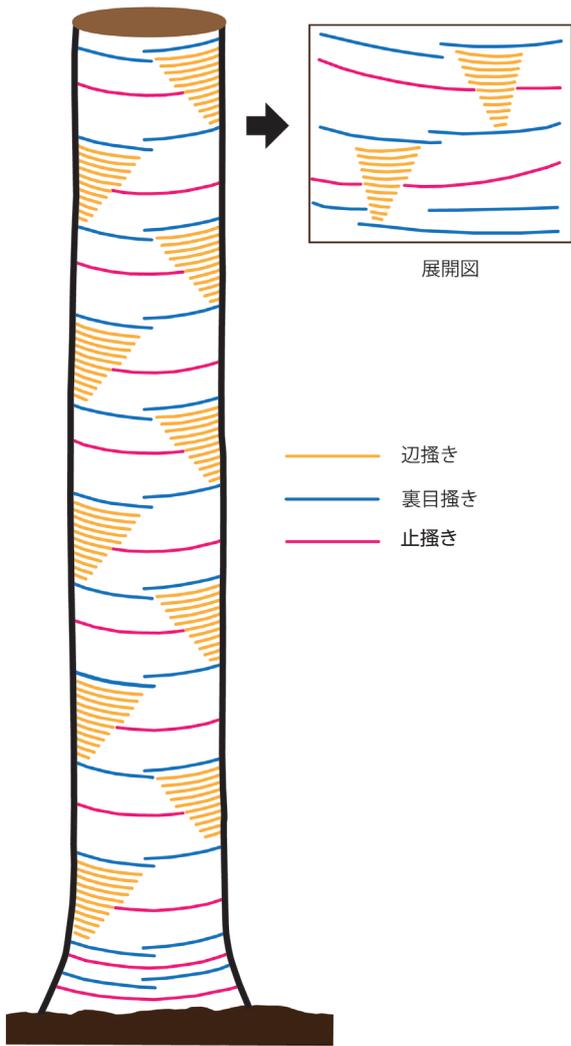


図 2-1 搔き傷の付け方の模式図



図 2-3 目立てを付ける



図 2-4 初辺搔き（6月下旬）



図 2-2 作業前にそろえた漆搔きの道具類



図 2-5 辺搔き

(図 2-2 ~ 2-9 の写真提供: 工藤竹夫さん)



図 2-6 裏目掻き (10月)



図 2-7 漆掻きにはしご(手前は裏目掻きに使用する。奥は辺掻きを使用する。)



図 2-8 枝掻きするウルシの束 (1月中旬)



図 2-9 枝掻き作業 (1月中旬)



図 2-10 伐採したウルシの木 (2018年12月24日 伊藤由美子撮影)



図 2-11 薪になったウルシの木 (2015年4月15日 伊藤由美子撮影)



図3-1 昭和10年秋・漆沢の生漆入札場（写真の封筒に、「昭和十年秋浄法寺村漆沢増田栄松宅漆液共同販賣實況」との記載有）。中段の左から6人目（背広の男性の後ろ）が、吉田三之さんの長兄・漆田宇八さん



図3-2 漆を掻く吉田信一さん（昭和50年代）



図 3-3 稲刈りをする吉田三之さん（昭和50年代）



図 3-4 稲刈りをする吉田カツエさん（昭和50年代）



図3-5 裏目掻きをする吉田信一さん（昭和57年10月）



図3-6 掻いた漆を樽に渡し入れる吉田信一さん



図3-7 道具の手入れをする吉田信一さん

（図3-1 ～ 3-7の写真提供：吉田信一さん）



図 4-1 二戸市金田一で漆を掻く大森清太郎さん



図 4-2 漆の実をとる大森新太郎さん（1960年代）



図 4-3 大森家の種苗作り (1): 漆の実を脱穀する。(2004年 3月22日撮影)



図 4-4 大森家の種苗作り (2): 脱穀した漆の実をふるいでふるって、種を取り出す。(2004年 3月22日撮影)



図 4-5 大森家の種苗作り (3): 種を精製する。(2004年 3月22日撮影)



図 4-6 大森家の種苗作り (4): 再度、種を精製する。(2004年 3月22日撮影)



図 4-7 大森家の種苗作り (5): 苗畑に堆肥を入れる (4月上旬)



図 4-8 大森家の種苗作り (6): 堆肥を入れた畑を、ロータリーで耕起する (4月上旬)。



図4-9 大森家の種苗作り(7):漆の種を蒔く(4月上旬)



図4-10 大森家の種苗作り(8):苗床に藁を敷く(4月上旬)



図4-11 大森家の種苗作り(9):種が芽を出し、双葉が出る(5月末)



図4-12 大森家の種苗作り(10):越冬のため、1年目の秋に、苗を掘り起こして移植する(1998年11月末撮影)



図4-13 大森家の種苗作り(11):2年目の春、移植する苗の選別作業(2005年4月28日撮影)



図4-14 大森家の種苗作り(12):2年目の春、苗を移植する(2005年4月29日撮影)



図 4-15 大森家の種苗作り (13)：2年目の秋、苗を掘り取る (1998年11月13日撮影)



図 4-16 大森家の種苗作り (14)：3年目の春 (種蒔きから2年後)、山へ植林する (2005年5月9日撮影)

(図 4-1 ~ 4-16の写真提供：大森清太郎さん)



図 4-17 種苗作りのための漆の木の実 (2018年12月22日、羽生淳子撮影)



図 4-18 大森清太郎さんの小屋に積んである漆の薪 (2015年12月22日、羽生淳子撮影)



図 4-19 大森清太郎さんの歌碑 (2015年12月22日、羽生淳子撮影)



図5-1 産直キッチンガーデン(1):建物正面(2015年4月撮影)。



図5-2 産直キッチンガーデン(2):店内(2018年12月撮影)。



図5-3 産直キッチンガーデン(3):屋外の看板(2018年7月撮影)。



図5-4 産直キッチンガーデン(4):野菜は原則として、すべて100円(2015年12月撮影)。



図5-5 産直キッチンガーデン(5):食品加工場(2015年12月撮影)。



図5-6 産直キッチンガーデン(6):そば、「きゃばもち」(小麦粉・黒砂糖・クルミ・重曹を加えてこね、柏の葉にくるんだ餅:後列オレンジの札)や、「じゅねもち」(エゴマ入りの串もち)なども売られている(2015年12月撮影)。

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
地球研ユニット：災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生

レジリエントな地域社会 Vol. 2

漆の木のある景観 ―岩手県二戸市浄法寺における漆掻きと日々の暮らし―

発行日／2019年3月22日

編者／人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 羽生淳子

発行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印刷／株式会社 北斗プリント社

ISBN: 978-4-906888-62-7

レジリエントな地域社会

Vol.2 2019年3月

はじめに

中静 透

1章 浄法寺プロジェクトの目的 羽生 淳子・伊藤 由美子
— 漆の木のある景観から考える地域社会の^{レジリエンス}弾力性 —

2章 漆掻きについて 伊藤 由美子

3章 漆掻きと生業の歴史の変遷 — 吉田 信一さんのお話 —

4章 漆掻きと漆の種苗作り — 大森 清太郎さんのお話 —

5章 産地直売所「キッチンガーデン」について — 小野 知子さんのお話 —

